「海外フィールド演習」における他者との出会いの効用
－インドネシアプログラムを事例として－

仲野　誠・小泉元宏・アクバル･ナドジャル･ヘンドラ・ハリ･ナレディ
デスビアン･バンダルシャ

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）第10巻 第２号 抜刷

REGIONAL STUDIES (TOTTORI UNIVERSITY JOURNAL OF THE FACULTY OF REGIONAL SCIENCES)Vol.10 / No.2

平成 25 年12月４日発行　　December ４ ,2013

「海外フィールド演習」における他者との出会いの効用

ーインドネシアプログラムを事例としてー

仲野誠*，小泉元宏**，アクバル･ナドジャル･ヘンドラ***，ハリ･ナレディ***，
デスビアン･バンダルシャ***

Outcomes of Encounters with Others in an Overseas Fieldwork Program: A Case Study of an Academic Exchange Program between Tottori University and University of Hamka in Indonesia

NAKANO Makoto, KOIZUMI Motohiro, AKBAR Nadjar Hendra， HARI Naredi,
DESVIAN Bandarsyah

キーワード: 海外フィールド演習，インドネシア，ムハマディヤ・ハムカ大学，気づき
Key words: Overseas fieldwork program, Indonesia, University of Muhammadiyah Prof. Dr. Hamka, awareness

1. はじめに

本稿で述べる「インドネシアプログラム」は鳥取大学地域学部の専門科目「海外フィールド演習」のひとつであり（表１），2012 年度（2013 年 3 月）に初めてパイロットプログラムとして実施された。そのカウンターパートは 2013 年 9 月に鳥取大学によって学術交流提携の締結が正式に承認されたインドネシアの首都ジャカルタにあるムハマディヤ・ハムカ大学（University of Muhammadiyah Prof. Dr. Hamka，以下「ハムカ大学」）である（写真１）。このプログラムは他の４つの「海外フィールド演習」とともに 2012 年度は JASSO（日本学生支援機構）留学生交流支援制度（短期派遣）の「地域再生を担うインターリージョナルな協働人材育成プログラム」の一環として実施された。

写真１　ムハマディヤ・ハムカ大学（B キャンパス）外観（2013 年 3 月 21 日撮影）

鳥取大学は 2012 年度より文部科学省「グローバル人材育成推進事業」に採択された。地域学部では，①地域学部学生および教員の国際交流の推進，②地域を見つめる目の複眼化と地球地域学という発想の醸成，③北東アジア研究の推進，の 3 点をもとに 2010 年度より「海外フィールド演習」の実施に向けて準備を進めてきた（筒井ほか 2013）。2010 年度は韓国・江原大学校における実習（田川・永松 2010）が実施され，それをきっかけにこの演習は試行錯誤を重ねてきた。それ以降，「海外フィールド演習」は「グロ

*鳥取大学地域学部地域政策学科（執筆担当箇所：1., 2.1, 3., 6.2）
**鳥取大学地域学部地域文化学科（執筆担当箇所：4.）
***ムハマディヤ・ハムカ大学教育学部（執筆担当箇所：2.2, 5., 6.1）

ーバル人材育成推進事業」にかかる地域学部の専門科目として位置づけられている。当初はそのフィールドは北東アジア地域が中心であったが，その後その範域は東南アジア（ベトナムやインドネシア）やアメリカ合衆国にも拡大し，プログラムの充実が図られてきている（筒井ほか 2013）。2013 年度からはこの演習は単位化され，本格的に始動することになった。

表 1　2012 年度「海外フィールド演習」パイロットプログラム一覧

プログラム名	期間	プログラム内容	使用言語	参加学生人数
韓国：江原プログラム	2012 年 9 月 2 日 -9 日	観光政策と自然環境の調査，江原大学学生との交流	主に英語	6 人
中国：東北農業大学プログラム	2012 年 9 月 21 日 -27 日	自然エネルギーの導入状況調査，東北農業大学学生との交流	主に英語	*実施地域の状況により中止
アメリカプログラム	2013 年 2 月 28 日 -3 月 7 日	カリフォルニア大学デービス校との交流，サンフランシスコ市内での多文化共生の調査	英語	6 名
ベトナム：フエプログラム	2013 年 3 月 3 日 -11 日	農村コミュニティと自然環境の調査，フエ大学学生との交流	主に英語	14 名
インドネシア：ハムカ大学プログラム	2013 年 3 月 19 日 -27 日	ハムカ大学学生とのワークショップ，エクスカーション	英語と日本語	5 名

（筒井ほか 2013:64 を改変）

本稿では，まず 2013 年 3 月 19 日から 27 日にかけて実施されたインドネシアプログラムの概要を記述する。そして参加学生にとってのこのプログラムの意義や成果を明らかにし，それを踏まえてこれからの課題を述べたい。なお，巻末にはこのプログラムの振り返りとして書かれた参加学生たちのレポートを抜粋して資料として掲載する。

2. 訪問地とハムカ大学の概要

2.1 インドネシアの概要

ハムカ大学は，約 1 千万人の人口を擁するインドネシアの首都ジャカルタにある私立大学である（図 1）。インドネシアは日本の約 5 倍の約 189 万平方キロメートルという面積に約 2.38 億人（2010 年）という人口を擁する東南アジアの国である。その社会は多様性に満ちており，300 を超える民族がおり，公用語はインドネシア語であるが他にも多様な言語が話されている。

インドネシアは世界で最大のモスリム人口を擁する国家としても知られており，その数は約 2 億人といわれる。各宗教の割合は，イスラーム教 88.1%，キリスト教 9.3%（プロテスタント 6.1%，カトリック 3.2%），ヒンズー教 1.8%，仏教 0.6%，儒教 0.1%，その他 0.1%である（外務省「各国・地域情勢　インドネシア」）。

2.2 ハムカ大学の概要

ハムカ大学の沿革，部局構成，そして特色は次のとおりである。

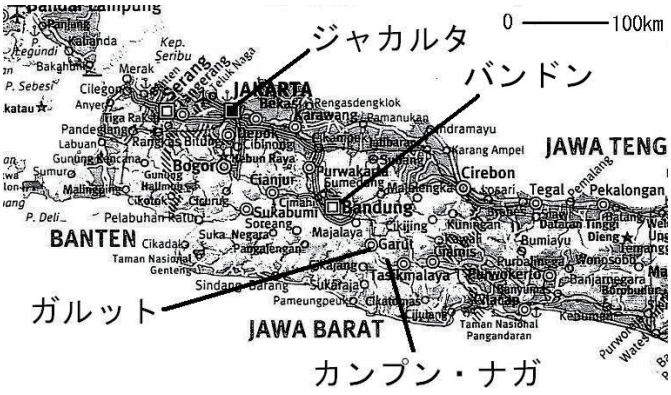

図１　インドネシア西ジャワ地方（Periplus “Indonesia Wall Map” を加工）

沿革

ハムカ大学（University of Muhammadiyah Prof. Dr. Hamka）は略して “UHAMKA” と表記される。約 1,200 人の教職員と約 13,000 人の学生を擁し，インドネシアの首都ジャカルタに位置する私立大学である。近代イスラーム改革運動として 1912 年にインドネシアのジョグジャカルタで創設されたムハマディヤ（Muhammadiyah）が母体となっている。ムハマディヤは政党ではなく，教育活動と医療活動を大きな支柱としてイスラームの精神を守りつつ社会の近代化を目指す組織であり（Burhani 2013），幼稚園から大学までインドネシア全土に 1 万を越える学校を擁する。ハムカ大学はその 154 のうちの高等教育機関のひとつである。

ハムカ大学は 1957 年 11 月に設立されたムハマディヤ教育大学（Muhammadiyah Institute of Teacher Training and Pedagogy）が前身である。1997 年にハムカ大学（UHAMKA）に改組した。現在は 35 領域の専攻が可能な 8 学部および 6 つの学問領域からなる大学院を擁する大学であり，その中でも教育学部が最大の規模である。

同大学のビジョンは「知的・情的・精神的知性においてより優れた卓越した大学（ “An Excellent University being superior in intellectual, emotional, and spiritual intelligence.” ）」である。その使命として次の 4 つのミッションを掲げている。

- イスラーム的生き方という価値の生涯学習，それへの専心，そして育成を支える教育と学びを体系化すること。
- イスラームの教えを保持して科学的思考の自由を発展させること。
- さまざまな領域，技術，技法において企業家精神を養うこと。
- イスラーム運動としてのすべての UHAMKA の活動を現実のものにすること。

以上のミッションからも，ハムカ大学はイスラーム的近代を目指す思想と実践を柱にしたイスラームの改革運動であるムハマディヤにもとづいた高等教育機関であることがうかがえる。

部局構成

現在ハムカ大学は次の 8 学部（35 学科）を擁する。その中でも本学部の実質的なカウンターパートである教育学部は学生数が同大学の半分を占める最大規模の学部である。

- 教育学部（Faculty of Teacher Training and Pedagogy）13 学科
- 経済学部（Faculty of Economics）5 学科
- 工学部（Faculty of Engineering）3 学科
- 数学・自然科学学部（Faculty of Mathematics and Natural Sciences）5 学科
- 健康科学学部（Faculty of Health Sciences）4 学科

・　社会科学部（Faculty of Social and Political Sciences）2 学科
・　心理学部（Faculty of Psychology）1 学科
・　イスラーム学部（Faculty of Islamic Studies）2 学科

大学院は次の 6 研究科（修士課程）がある。
・　教育評価学・教育学研究科（Master of Evaluation and Educational Research）
・　教育行政学研究科（Master of Education Administration）
・　経営学研究科（Master of Management）
・　公衆衛生学研究科（Master of Public Health）
・　インドネシア教育学研究科（Master of Indonesian Education）
・　英語学研究科（Master of English Language）

特色

上述のとおりハムカ大学は 8 学部を擁する総合大学である。そのなかでも教育学部はその学生数においてハムカ大学の約半分を占め，同大学の柱といえる。一般的にインドネシアは親日的な国といわれるが，日本語教育学科を中心として日本への強い関心を示すハムカ大学はより親日的な雰囲気に包まれており，教員及び学生たちの日本への関心は驚くほど強い。

現在，インドネシアの首都ジャカルタには 300 以上の大学がある。そのなかで日本語学を専攻することができる大学は 12 大学であり，そのうち日本語教育学を専攻することができるのはハムカ大学を含め 2 大学のみである（ハムカ大学とジャカルタ国立大学）。ハムカ大学の日本語教育学科は 1997 年に創設され，ジャカルタではいちばん古い日本語教育の高等教育機関である。ハムカ大学は “Toward World Class University” （「世界水準の大学へ」）という標語を掲げ，日本をはじめ，国際交流事業を発展させることによって海外の大学から積極的に学び，大学の水準を引き上げようという強い姿勢を示している。

3. プログラムの概要と学生の経験

ここではまず鳥取大学地域学部のインドネシアプログラムが始まることになった経緯を説明する。そしてプログラムのねらいとその概要を述べる。

3.1 プログラム実施の経緯

本プログラムの事前準備状況は次の表２のとおりである。このような手順でパイロットプログラムの準備を進めた。

表２　インドネシアプログラムの事前事後の作業

日付	内容
2012 年 4 月 19 日～22 日	ハムカ大学で開催された国際セミナーに仲野が参加。交流が開始。パイロットプログラムの実施案が浮上。
2012 年 5 月	ハムカ大学との学術交流協定の検討開始
2012 年 7 月	ハムカ大学とパイロットプログラム実施の協議を開始。

2012 年 11 月 13 日	インドネシアプログラム参加学生募集開始。
2012 年 12 月 25 日～31 日	パイロットプログラムの現地視察およびハムカ大学との打ち合わせ。
2013 年 1 月 9 日	インドネシアプログラム申込締め切り（定員 5 名に対して申込者 10 名）。
2013 年 1 月 11 日	インドネシアプログラムの説明会開催。
2013 年 1 月 15 日	インドネシアプログラム参加者決定（5 名）。
2013 年 1 月 21 日，23 日，2 月 14 日	鳥取大学国際交流センターによる危機管理セミナー開催。
2013 年 1 月 23 日	インドネシアプログラム参加申込書の提出締め切り。
2013 年 1 月 25 日	インドネシアプログラム参加者による自己紹介と打ち合わせ。
2013 年 2 月 4 日	インドネシアプログラム参加のための事前課題レポートの提出。
2013 年 2 月 18 日，26 日	事前学習会（文献講読など）。
2013 年 3 月 15 日	インドネシアプログラムの最終確認ミーティング。
2013 年 3 月 19 日～27 日	プログラム実施
2013 年 3 月 31 日	JASSO 関連書類提出締め切り。
2013 年 4 月 22 日	インドネシアプログラム反省会，各自のレポートの読み合わせ。

鳥取大学とハムカ大学との最初の接触は 2012 年 4 月 22 日にハムカ大学で開催された国際セミナー “Japanese Language Education and Regional Learning: Linguistics, Culture, Ethos” に筆者（仲野）が招へいされ，“Changing roles of Japanese language education in Japan: The impact of globalization” という報告を行ったことがきっかけである（写真 2）。その時は，それに加えてジョグジャカルタ市とスラバヤ市のムハマディヤ教育システム下の小学校でインドネシア人教員に向けて日本の近代化や経済発展と幸福度に関するいくつかのレクチャーなどを行った。

写真２　2013 年 4 月にハムカ大学で開催された国際セミナーの様子（2013 年 4 月 19 日撮影）

この訪問時，ハムカ大学の学長より鳥取大学との学術協定締結の提案がなされた。これを鳥取大学にもち帰って検討したところ，まだ学術交流においても学生交流においても実績がほとんどないために，時期尚早と判断された。ただし，東南アジアは鳥取大学の国際交流プログラムを展開する上でたいへん重要な地域であり，またハムカ大学との交流は本学の学生及び教員にとって学ぶ意義が大きいと判断され，海外フィールド演習のパイロットプログラムを 2012 年度内に実施する運びとなった。

同年 12 月 25 日から 31 日には，筆者がそのパイロットプログラムの現地視察のためにフィールド演習の候補地を訪れ，ハムカ大学で打ち合わせを実施した。その際，視察した現場は次のとおりである。ハムカ大学（授業見学を含む），伝統的なインドネシアを学ぶ場としてのジャカルタ市内のモスク，近代的インドネシアを学ぶ場としてのショッピングモール，伝統と近代が混在するジャカルタ中心街と旧市街，バンドン市の国立インドネシア教育大学，ガルット市とその近辺の村，カンプン・ナガ村などだった（図 1）。これらの候補地から研修のフィールドを選ぶこととした。

これらの準備をもとに 2013 年 3 月 19 日から 27 日にかけて「海外フィールド演習インドネシアプログラム」を実施した。プログラム内容については後述する。

このプログラム実施後は，両大学の参加学生はプログラムを振り返るためのレポートを作成し，互いのレポートを交換してプログラムの成果や課題を共有した。鳥取大学においては 2013 年 4 月 22 日に反省会を実施した。それぞれのレポートをもとにお互いの気づきを共有し，またこのプログラムの今後の展開のために課題を抽出しあった。

さらに同年 5 月に筆者がハムカ大学を訪問し，同大学教員たちとこのプログラムを振り返るミーティングを実施した。さらには今後，海外フィールド演習などの学生交流及び教員同士の共同研究を深めるための打ち合わせや，学術協定締結のための文書作成について具体的な会議も行った。また 5 月 16 日及び 18 日には筆者が同大学日本語教育学科の最大の行事である「春祭り」に参加し，同大学をより深く理解する機会を得た。

このパイロットプログラムを機に，ハムカ大学との学生交流はこの「海外フィールド演習」をもとにこれからも発展的に進めることになった。双方の大学間の交流の時期は比較的短いものの，特に学生交流が「海外フィールド演習」という正式な科目として位置づけられ，今後も発展的に継続していくことが確定していることや，教員同士の共同研究の案も具体的に進行し始めているなどという理由により，同大学との学術交流協定の締結を具体的に進めることになった。その結果，2013 年 9 月に鳥取大学国際交流委員会で 2 大学間の学術交流協定および学生交流が正式に承認され、同年 10 月 7 日にその調印式が鳥取市にて行われた。

3.2 プログラムの概要と学生の経験

プログラムの概要

このプログラムの一義的なねらいは，これまで地域学部で身につけたスキルを使って海外経験を積んでみることだった。世界の広がりを実感しながらそれまでの自分の「地域」概念を相対化してみたり，人間の多様な生き方を知るという基礎的な経験を仲間とともにするということである。

そのキーワードとして「等身大のイスラームに出会う」ということを挙げた。重要視したことはモスリムであるハムカ大学の学生とともに 1 週間過ごしながら，できるだけ一般的な知識の水準にとどまらずにイスラーム社会を自分の身体で経験し，メディアに流布するイメージではない「等身大のイスラームに出会う」ことだった。そしてその出会いを通して自分が生きている地域や自分の生き方を相対化する機会を得ることをプログラムの目的とした。ハムカ大学の学生・教員たちや訪問先のインドネシアの村の人々と出会い，寝食を共にし，インドネシアの日常の生活を経験することによって，自らのこれからの生き方や日本社会の将来を真剣に考える動機付けを得ることが期待された。このプログラムをとおして学生たちはそのような有益な経験をすることが望まれた。

参加学生は，表 3 のとおり鳥取大学地域学部からは 5 名だった。その内訳は 2 年生が 3 名，3 年生は 2 名であり（学年は 2012 年度時点のもの），学科別に見ると地域政策学科が 1 名，地域文化学科が 3 名，地域環境学科が 1 名だった。全員女性であった。地域政策学科の仲野誠と地域文化学科の小泉元宏が引率教員として参加した。

ハムカ大学からは，男性 4 名，女性 6 名，合計 10 名の学生が参加した（表 4）。1 年生が 1 名，3 年生が 3 名，4 年生が 6 名だった。学科別では日本語教育学科から 8 名，歴史教育学科から 2 名の参加があった。

表３　鳥取大学からの参加学生

	所属	学年
1	地域学部地域政策学科	3
2	地域学部地域文化学科	2
3	地域学部地域文化学科	2
4	地域学部地域文化学科	3
5	地域学部地域環境学科	2

表４　ハムカ大学からの参加学生

	所属	学年
1	教育学部日本語教育学科	1
2	教育学部日本語教育学科	3
3	教育学部日本語教育学科	3
4	教育学部日本語教育学科	3
5	教育学部日本語教育学科	4
6	教育学部日本語教育学科	4
7	教育学部日本語教育学科	4
8	教育学部日本語教育学科	4
9	教育学部歴史教育学科	4
10	教育学部歴史教育学科	4

プログラムの行程と学生の経験

本プログラムの行程は次の表５のとおりである。ここではその行程を記述するとともに，参加学生たちがその時々にどのような経験をしたのかを本人たちのレポートを引用しながら概観していく。

表５　インドネシアプログラム行程

日付	活動内容
2013 年 3 月 19 日（火）	13:10 鳥取空港発（NH296） 14:20 羽田空港着。バスで成田空港に移動。 宿泊：東横イン成田空港
3 月 20 日（水）	10:00 成田空港発（NH937） 15:40 スカルノ･ハッタ空港(ジャカルタ)着 空港でハムカ大学の教員に迎えられ，市内に移動して夕食を兼ねてプログラムに関する打ち合わせ。 宿泊：ホテル・サンチカ
3 月 21 日（木）	9:30 ハムカ大学にてオリエンテーション（ハムカ大学関係者約 20 名，鳥取大学関係者 6 名参加）。 12:00 昼食後，学生たちはハムカ大学の視察と授業見学（教員は引き続きプログラムの打ち合わせ）。 13:00 ジャカルタ市内のエクスカーション（カンプン･バンダン Kampung Bandan 地区） 16:00 エクスカーション終了。アル - アズハル･インドネシア大学（Al Azhar Indonesia University）のモスクでお祈りの見学。屋台で夕食。 （夕方，小泉がジャカルタで訪問団に合流） 学生：教育学部長宅にてホームステイ，教員：ホテル・サンチカ宿泊。
3 月 22 日（金）	8:30～15:30 ハムカ大学主催の国際セミナー“Spiritual Ethics in Developing Urban Culture and Society"に参加。仲野と小泉がそれぞれ次の題目で報告。

	仲野報告：“Changing Family in the Context of Japan's Modernization” 小泉報告：“Socially Engaged Art and Its Social Background” 16:00～18:30 両大学の学生同士のワークショップ開催。本学の学生 5 名とハムカ大学の 5 名が日本とインドネシア社会について報告及び議論を展開した。
3 月 23 日（土）	9:20 エクスカーションのミーティング後，大型バスで大学を出発し，カンプン・ナガ村（Kampung Naga）へ移動。 17:00 カンプン・ナガ村に到着。ホームステイについての説明を受けた後，それぞれのホームステイ先に移動。
3 月 24 日（日）	7:30 伝統楽器やクラフトの製作の見学。 8:20～9:30 カンプン・ナガ村の村長より村の概要についてのレクチャー。 9:40～11:00 村あるき。民家の訪問と見学。 13:00 村を出発し，ガルット（Garut）へ移動。途中ガルット市街地散策。 17:00 ガルット郊外到着。 19:30～20:30 村のモスクで子どもたちによるコーランの勉強会を見学。 20:30 民家で夕食。その後, 村人から日本占領下における植民化の経験などを聴く。
3 月 25 日（月）	6:00 村あるき。 9:00 村の小学校を見学。 10:30 ガルットを出発してバンドン市に移動。 15:00～18:00 バンドン市内のまち歩き。 18:00 バンドン市出発。ジャカルタまでの車中，プログラムの振り返りを実施。 20:30 ハムカ大学到着。 学生：教育学部長宅ホームステイ，教員：ホテル・サンチカ宿泊。
3 月 26 日（火）	9:30 ジャカルタ市内のムハマディヤ第２小学校を見学。 14:30～17:00 : ハムカ大学にてハムカ大学の教職員および学生たちとこのプログラムの反省会および評価会。 17:00 ハムカ大学を出発して空港へ移動。 21:30 スカルノ・ハッタ空港(ジャカルタ)発（NH938）　機内泊。
3 月 27 日（水）	06:50 成田空港着 11:15 羽田空港発（NH295） 12:35 鳥取空港着

次に，上の行程にもとづき，プログラム内容を概観しよう。

初日の3月21日はまず自己紹介を兼ねたオリエンテーションを実施してこのプログラムの目的や活動内容および日程を確認した。参加者は鳥取大学の引率教員 1 名と学生 5 名およびハムカ大学の教員と参加学生たちであった。その後，両大学の教員たちは引き続きプログラムの打ち合わせを続け，双方の学生たちはハムカ大学学生たちの引率でハムカ大学内の見学と授業参観を実施した。この時，鳥取大学の学生たちは学内のモスクでイスラームの祈りに参加し，ハムカ大学の学生たちに教えてもらいながら人生において初めてイスラームの祈りを経験した（写真３）。

短い祈りの時間ではあったが，この経験は鳥取大学の学生たちにとってインドネシアでの最初の衝撃となったようである。ある3年生はこの経験を次のように振り返っている。

写真３　ハムカ大学構内のモスクで祈る学生たち（2013年3月21日撮影）

> あの瞬間だけは誰もが神と一対一で向き合い，その存在を感じているのだ。どんな肩書きや財産も，どんな苦しみや貧しさも，神の前では全て意味がない。一人の人間として，神と一対一で向き合っているのだ。それはとても孤独な時間なのではないだろうか。そして彼らは共通でその感覚を持っている。共有できる感覚があるということが，私は少しうらやましかった。
>
> それと同時に，私は何かと向き合って生きてきただろうか？という疑問が湧いた。誰かと，何かと，真剣に一対一で向き合ったことはあるだろうか？もちろん，今までに全くないわけではない。だが，向き合うことを避けてきたことの方が多いのかもしれないと気付いた。自分には関係ないから，興味がないから，面倒くさいから，と何かと理由を探して見て見ぬふりをしてきたことがある。私はその都度，自分と向き合うチャンスも逃してきたのかもしれない。自分ではどうすることもできない問題に出会った時，手に負えないからとすぐに諦めてしまっていた。手に負えなくとも，向き合おうという姿勢こそが重要であるということを忘れていた。彼らは神という自分ではどうすることもできない大きな存在と向き合うことで，その他のどんな大きな問題とも向き合えるような力を育んできたのではないだろうか。隣で祈りの言葉をつぶやきながら，真剣に神と向き合っている彼女たちを見て，果てしないものに向き合うことの強さ，向き合うことを覚悟することこそが大切なのだと教えられている気がした。

鳥取大学の学生たちは女性用の祈りの衣装を借りて着け，おそらく好奇心と不安に駆られながらモスクに入り，見よう見まねで生まれて初めてのイスラームの祈りをしたことであろう。図らずもその短い時間の経験が，上述のような自分のこれまでの生き方を振り返らせるようなきっかけになった。

写真４　カンプン・バンダン地区でのエクスカーション（2013年3月21日撮影）

その後，ジャカルタ市内のエクスカーションとしてジャカルタ駅裏手の線路沿いに広がるカンプン・バンダン（Kampung Bandan）地区を訪れた（写真４）。ここはいわゆる都市スラムである。事前に筆者（仲野）は観光地的な場所ではなく，インドネシアの日々の暮らしやそのリアリティが感じられるような場所でのエクスカーションをしたいと要望していたため，ここを研修先として選んでくれたと思われる。ハムカ大学教育学部歴史教育学科の教員と学生たちがその地域選定と調整の準備をしてくれた。おかげでそこの自治会長の案内で説明を受けながら地域内を歩くことができた。大都市ジャカルタ内のスラムの劣悪な住居環境に学生たちは衝撃を受けていた。地域のあちこちにゴミの山が目立ち，その悪臭が鼻を突

いた。そのゴミの山から資源として売れるものを拾い集めている人たちにも出会った。

それ以上に学生たちの印象に残ったのはその住民たちの明るさと人々のたくましさだった。この研修では調査を行ったわけではないのであくまでも印象論の域を出ないが，そこで出会った人たちが自分たちを温かく迎え入れてくれ，生き生きと生きている様子は学生たちのそれまでの「スラム」イメージを大きく覆したようであった。

たとえば鳥取大学のある 3 年生は，帰国後に次のようにこの経験を振り返っている。

> Kampung Bandan ではテレビで見たことのあるスラムが広がっていた。そこではまず炎天下にさらされてさらに匂いのきつくなったゴミの山が待っていて，その先には多くの家々がぎっしりと建ち並んでいた。継ぎはぎだらけの家があったり，地面はぬかるんでいて灰色の水たまりがある部分があったり，とても綺麗で住みやすいとは言えないようなところだった。しかし，可哀想という思いは全く持たなかった。それは底抜けに明るい子ども達の笑顔，村の人の優しい微笑みがあったからだと思う。この村の人達は今の生活に満足しているのか，そうではないのか分からないが，彼らの明るさや笑顔からは，不安で仕方ない，絶望的だというような心情は感じられなかったし，今日本に帰って彼らの写真を見るとこちらまで元気をもらうほどである。
>
> この村で感じたことは，自分が，日本の社会が幸せの価値をお金や安定，成長などによって見出していて，固定されたたった一つの幸せ像しか持ち得ていないということだ。自分がとても寂しい人間のように思えた。幸せの形ってひとつではないのだなと自分の目で見て確かめることができ，実感することができた。自分の持っている悩みや考えていることがとてもちっぽけなことに思え，心配や不安になるばかりではなく，もっと楽しく笑顔で生きていけるはずだと思った。

ある 2 年生は次のように述べている。

> 私は今まで，スラム街に住んでいる人は可哀相だと思っていた。しかし，出会った人々は誰もが笑顔でおだやかに自分たちの時間をゆったりと過ごしていた。そこには私が思っているような可哀相なんてものは存在していなかった。確かに生活環境や経済面では厳しいものであるが，人々はきちんと自分の環境を受け入れていて，満足はしていないかもしれないが，ゆったりと自分たちの生活を営んでいたのだ。
>
> それを考えると，私はあの村をスラム街と呼んでよいのかわからなくなった。日本に帰って，この村について説明するとき，「スラム街に行った」と言うのに抵抗があった。私が見たものはきっと日本人の多くが抱いているスラム街とは違うものだったからだ。スラム街と言ってしまうだけで，聞いた人は私が話すことを聞いても固定概念ができてしまうのがとても嫌だった。あの人たちは貧しいかもしれないけれど，温かくて楽しそうだった。果たして私があの人たちみたいに貧しい状況であんな風に過ごすことができるだろうか。

これらの記述からわかるように，学生たちは「かわいそうなスラム住民」というイメージとは大きく異なる別の〈リアリティ〉を見たようだ。もちろん，「スラム」の暮らしを美化することは大変暴力的であり，そのような短絡的で安易な結論を生むフィールドワークには慎重であるべきだろう。

しかし，学生たちは自分たちのそれまでのイメージの世界を打ち破っていく貴重なきっかけを得ることができたのではないだろうか。もちろん「それが現地の人たちにどのように役に立つのか」という問いに対してどう応えることができるのか，という根源的な課題はあいかわらず残されたままではある。

プログラム 2 日目，3 月 22 日にはハムカ大学で国際セミナー “Spiritual Ethics in Developing Urban Culture and Society" が開催された（写真５）。仲野が基調講演として “Changing Family in the Context of Japan's Modernization” という報告を，そして小泉が “Socially Engaged Art and Its Social Background” という報告をそれぞれ行った。インドネシア人研究者たちもともに研究報告をし，グローバル化によって変容し続けるそれぞれの社会の比較研究セミナーとなった。

写真５　セミナー “Spiritual Ethics in Developing Urban Culture and Society”（2013 年 3 月 22 日撮影）

それに引き続き，双方の学生によるワークショップを実施した（写真６）。本学の学生 5 名とハムカ大学の 5 名が日本とインドネシアにかかるテーマについて報告を行った。

写真６　両大学の学生によるワークショップ（2013 年 3 月 22 日撮影）

そのワークショップで報告されたテーマは下の表 6 のとおりである。各報告タイトルからわかるように，ハムカ大学の学生の報告はインドネシアの文化や経済に関する一般的な説明が主な内容だった。それに対して，鳥取大学の学生は自分の日常生活をめぐる諸問題についての報告が多かった。このワークショップについては，当初は日本やインドネシアそれぞれの社会の「教科書的な」報告よりは，報告する学生の生活世界における学生のリアリティを共有することを目指そうとした。それは，せっかく同じ時間に同じ場所で顔をあわせてお互いに学びあえるわけだから，一般的な知識よりも報告者（学生）固有の経験を語り合い，それぞれのリアリティを共有しようという趣旨だった。

表６　ワークショップにおけるハムカ大学学生と鳥取大学学生の報告

ハムカ大学学生の報告題目	鳥取大学学生の報告題目
インドネシアの挨拶	私の日常――家族と大学生活をとおして
インドネシアの握手	日本のサブカルチャー
イスラームのヒジャブ	仮面をかぶる日本人――私の日常的な人間関係
インドネシアの都市化	日本における自殺
ジャカルタにおけるストリートベンダー	日本における女性のライフスタイル

結果的にこの趣旨が十分に共有された上でワークショップが開催されたとは言えないかもしれな

い。しかしながら，実際に顔をつき合わせて対話する経験そのものが非常に大切なことであった。文献を読んで理解する（理解したつもりになる）インドネシアとは異なるインドネシア像がその場に立ち現れた。ハムカ大学の報告には一般的な基礎知識が多かったが，それも鳥取大学の学生にとってはインドネシアを理解するための重要な時間であった。

一方，鳥取大学の学生たちの報告は，自分の日常の暮らしのなかで疑問をもっている事柄についての報告が多かった。それを「家族」「人間関係の希薄さや互いの信頼の弱さ」「多発する自殺」「女性として生きることの課題」「サブカルチャー」というやや抽象度を上げたテーマとして，しかしながら具体的な自分の経験を織り交ぜながら報告した。翻って，それらは現代の日本が抱える諸課題をリアルに浮き彫りにする報告になった。

ハムカ大学日本語教育学科の多くの学生にとっての日本は「成長し続けている先進国」というイメージのようであった。それはアニメなどのサブカルチャーも含めて，「経済大国」「進んだテクノロジーをもつ国」「汚職が少ないクリーンな国」ということが彼らの間でよく語られることからもうかがえる。伝統的な日本文化に対する憧れもよく口にされた。そのような「イメージとしての日本」に対し，鳥取大学の学生たちの報告は概して「縮小していく日本が抱える諸課題」に関するものだった。そのような報告にハムカ大学の学生たちは驚き，「もうひとつの日本」を発見することになったのではないだろうか。日本が抱える困難や課題を知り、「憧れの日本」からやって来た友人たちに同情や励ましを表明していた。

当初は，これらの報告の後に学生同士のディスカッションをする予定であったが，時間が足りなくなったために報告のみに留めざるを得なかった。帰国後の反省会で，鳥取大学の学生たちはワークショップでちゃんとディスカッションの時間を設けたかったと言っている。これは次回のプログラムの課題として残った。

3 月 23 日から 24 日はカンプン･ナガ村（Kampung Naga）へのエクスカーションを実施した（写真 7）。この村は電気のない村として知られており，ホームステイを経験した。近代化された「便利な暮らし」に慣れた学生たちは，ここでも自分のあたりまえを問い直す機会を得た。たとえば，鳥取大学のある 2 年生は次のようにこの村での経験を振り返っている。

> 野外での洗髪はとても開放的で気持ちが良かった。私は電気がない，シャワーなどの設備が整っていない＝不便と結び付けて考えていたが，そう考えること自体が不便なのかもしれないと感じた。私たちはより快適により楽にと，欲をかいて利便性を物に追求しすぎたために，それに頼って，自分が可能だったことが不可能になり人間自体は不自由になっているところがあると思った。……
>
> この時代のこの世界にこういった調和や協調を真っ先に考えられる Kampung Naga の人々を尊敬したい。……希望にも似たような，とても温かい気持ちになった。私自身は自分主体で自分が良ければ他はどうでもいいと考える人間であるので，Kampung Naga のそのスタイルに今の自分が問われているとも感じた。……この村

写真 7　カンプン･ナガ村に到着した学生たち（2013 年 3 月 23 日撮影）

の生活をたくさんの人に伝えてきたいと思う。

また3年生はカンプン・ナガ村での経験について次のように述べている。

> 彼らの考え方，生き方はとてもシンプルなものだった。かつ，食材なども自分達で作り，足りないものは他から補い，支え合い，電気に頼らない分手間もかけてゆっくりと丁寧に生きているようだった。このような生き方が，私にできるのか，日本でできるか分からない。しかし，インドネシアの村で，自分とは違う考え方，生き方を持った人達と出会ったことで，日々の生活に彼らの生き方を意識したり，取り入れたりすることが可能だと思う。彼らの生き方から学んだことは私の人生をより楽しいものしてくれたり，支えてくれるものになると思う。

これらの文章に端的に表れているように，カンプン・ナガ村は学生にとって単なる観察・考察の対象ではなく，鏡として日本における自分の日々の暮らし方を照射する役割を果たすことになった。

3月24日から25日にかけてガルット近郊の村へのエクスカーションを実施した。そこでは村人との交流，モスクでの子どもたちのコーラン教室見学などをとおしてインドネシアの村の日常を経験する機会を与えてもらうことができた。この滞在で特に印象的だったのが，24日の晩に訪問した村の子どもたちが学ぶモスクでのコーラン教室だった（写真８，９）。

写真８　コーラン教室の概要を聞いている様子（2013年3月24日撮影）

写真９　コーラン教室で学ぶ村の子どもたち（2013年3月24日撮影）

ここでは金曜日の夜を除き，毎朝4時から6時半，および夕方5時から9時まで村の子どもたち全員がコーランの学習をする。勉強内容は，コーランの読み方，翻訳，生活になかにコーランがある意味，そしてお祈りの作法などである。7歳から祈りは義務であり，1日5回礼拝をしなければならない。授業料は無料であり，モスクおよび教室の維持費は村人たちによって賄われている。

この教室を見学した鳥取大学の学生たちは，自分たちとこの村の人たちの生き方や価値観との間に大きな隔たりを感じ，大変混乱することになった。それは「自由な選択を前提とする生き方」とそれと対照的な「不自由な生き方」の相克をめぐる混乱といえるだろう。学生たちは宗教を含み自分の価値観は自分で決めるべきものであり，決して他者によって強制されるものではないと信じていた。しかしコーラン教室で出会った子どもたちは，自己の選択の結果としてではなくモスリムになり，そして一生モスリムとして生きていくということをこの教室で聞いた。教室の見学を終え，ほとんど街灯がない暗い夜の村の路上で，学生たちは自分が感じた違和感を1時間以上，立ち話で議論を続けた。この経験を振り返り，鳥取大学の3年生は次のように述べている。

彼らのイスラム教徒としての自覚は自然に発生したものではなく，学びを通して確立されたものであるということを知った。私は日本人であるための努力はしていない。それは努力をする必要なしに与えられたものだからである。だが彼らはイスラム教徒になるための努力をしている。努力をしなければイスラム教徒にはなれないからだ。つながりを作るということは，それほどまでに難しいということなのかもしれない。それ故に彼らはイスラム教というものに対して，愛着や執着心があるのではないかと思う。簡単に切り捨てるわけにはいかないし，切り捨てることのないように幼い頃から訓練を受けているのだ。頑張って掴んだつながりだからこそ心の拠り所になり得るのだろうし，自分で築き上げる以上に安心して寄りかかれる安らぎはないのかもしれない。

その訓練を言い換えれば，選択肢のない強制的な刷り込み教育という風にも捉えることができる。だが，選ぶことのできない環境の中に有無を言わさず放り込まれることは，どんな文化にもあることだ。彼らが強制的にムスリムになるように，私は強制的に私になったのでないだろうか。だが，彼らと私の間には決定的な違いがある。私は自分自身に違和感を覚えた時，変わろうと思えばどんな自分になりたいか自由に決めることができる。だが彼らはそうではない。イスラム教徒でなくなることは簡単なことではないはずだからだ。彼らは幼い時からムスリムとして育てられ，そのまま自然の流れで大人になってもムスリムとして生きていく。私は決してそれ自体が悪いことだとは思わない。私自身も植えつけられた価値観を持っているからだ。それが宗教という精神的な面が強い選択になると，いきなり悪いことのように感じてしまうだけで，どんな人であれ少なからず偏った価値観を持っているものではないのだろうか。

ただ，その価値観や文化から抜け出せないということには窮屈で圧迫されたような感じを受ける。抜け出すという選択肢を簡単に選べないということに少し違和感を覚えた。だが，だからこそ彼らはより強く自分のいるべき位置を確信することができるのではないだろうか。そこに確実な自分の居場所を見つけることができるのかもしれない。もしかしたら，選択肢のない幸せというものが存在するのかもしれないのだ。私たちはどこにでも行けるけれど，どこにでも行っていいからこそ逆に足元が不安定になってしまっているような気がする。選択肢があることは幸せだと思ってきたが，本当にそうなのだろうか。選択肢がないことは不幸なのか。色々なことを考えさせられた夜だった。

コーラン教室で学ぶ子どもたちのあり方に大きな衝撃を受けることをきっかけに，この学生は「自分自身のつくられ方」に思いをめぐらすようになる。そして「選択肢のない幸せ」という，おそらくこれまでは想像もしたことがなかったであろうもうひとつの価値に気づいたようだ。どちらがより幸せかという二項対立的な問いはここではあまり意味がない。ここでも学生たちはそれまでの自己の思考を相対化し，より広い世界観を獲得するための大切なきっかけを得たようである。

翌 3 月 25 日の朝，ガルット郊外の村を出発し，バンドン市に移動し，まち歩きを実施した。その後 18 時頃にバンドン市を出発し，ジャカルタのハムカ大学への帰路についた（写真 10）。その道中，このプログラムの振り返りとして，バスの車中で参加者それぞれがこのプログラムで学んだことを語り合った。この数日間のプログラムで行動をともにすることによって，それぞれの学生がかけがえのない友人を得た喜びを涙を流しながら語り合った。それはひと言で表現すれば「本当に楽しく充実した一週間」（3 年生）と言えるだろう。特に日本人学生にとって、インドネシア人学生の陽気さとホスピタリティあるいはまっすぐに遠慮なく自己表現する様子を目の当たりにしたことは衝撃

的だったようである。

このプログラムではバスで移動することが多かったが（写真 11），そんなたわいもない時間においても学生たちは大切な気付きを得たようである。ある 2 年生は次のように述べている。

> スケジュールを通じて移動のバス内では，笑い声や歌声が絶えなかった。……ごく普通のギター1本と歌声だけで，こんなに人を幸せにできるのだと感動した。音楽は世界共通言語であると感じた瞬間だった。歌を一緒に歌うだけでどうしてこんなに感極まるのだろうと不思議に思った。お互い住む環境や思想は違えども，同じ音楽で同じ方向を向き，ハーモニーを成していたことが私に安心感を与えた。ふと，これが相手を理解することなのではないかと感じた。単に移動のバス内でみんなで歌っていただけの一瞬もそう考えると大切な時間であった。

バスでの移動などという一見無意味な時間でさえ意味のあるものであったという観点から，ある 3 年生は次のようにこのプログラムを振り返っている。

> 無駄な時間なのかもしれないが，その時にしか，生まれないものがあったということに気づかされた。インドネシアの学生を見ていて，彼，彼女らは自分達の感情や反応を表現する力を持っていると感じた。声を発することで，体全体を動かすことで，表情を一瞬一瞬変化させることで，自分達の気持ちを素直に表現していた。その姿はとても輝いていて魅力的だった（写真 12）。

ここで述べられている「魅力」は自己の反省へとつながる。この学生は「私自身は疲れているならば移動中に仮眠をとり，時間をしっかり守って無駄な時間がないようにするなど，とても合理的な考え方をしている」のだが，「それは自分のことや損得を優先に考えていて，とても悲しいことなのかもしれない」と考えるようになった。また別の 3 年生は「“私たちはあなたとつながりを持ちたい”という意思表示を積極的にしてくれる彼らや彼女たちの

写真 10　カンプン・ナガ，ガルット，バンドンのエクスカーションからジャカルタに戻った学生たち（2013 年 3 月 25 日撮影）

写真 11　バスの中での合唱（2013 年 3 月 23 日撮影）

写真 12　ガルット郊外の村を談笑しながら歩く学生たち（2013 年 3 月 25 日撮影）

輪の中に引き込まれることに，私は安心感と充実感を覚えた」と述べている。

ある学生は「イスラームについて学びたい」という強い動機からこのプログラムに参加した。他の学生たちも，インドネシアあるいはイスラームあるいは異文化について学びたいという学びへの欲求がこのプログラムへの参加に結びついていた。もちろん，そのような学びはかなりの程度達成されたと思われるが，その一方で，このプログラムにおける最大の収穫はインドネシアでかけがえのない友人を得たという極めてシンプルなことといえるかもしれない。ある 3 年生は「私はまさかインドネシアで涙が出るほど大爆笑するとは思っていなかったのだが，その想像を裏切られる」経験になったという。また別の 2 年生は「人々のあたたかさや笑顔に触れ，一週間という短い期間であったが，ずっといたい気持ちになるほどだった」と述べている。このプログラムで初めて出会ったインドネシアの友人たちはあっという間に「大好きなみんな」（3 年生）になっていった。

「陽気な友人」を獲得するという経験は，同時にそれまでの自分自身を振り返ることにもなった。ある 2 年生は自分のインドネシア経験を次のように振り返っている。

> インドネシアに行って，私は自分がどれだけ自分勝手で小さくて情けない人間か思い知らされた。彼らの温かさはとても居心地の良いもので離したくないと思うものだった。出会って数分で離れがたいと感じることは日本では経験したことがなかった。特に，先生や婦人，ホームステイ先のお母さんといった女性は本当に包容力に溢れていてその温かさに涙が出そうになるほどだった。言葉が上手く通じなくても，笑顔やハグだけで，とても近くにいるような不思議な感覚だった。

「イスラームを，インドネシアを，知りたい」という知的欲望は，いつしか他者と出会い，そして自己と出会い直すきっかけへと転換されていったようにも思える。

3 月 26 日の朝はジャカルタ市内のムハマディヤ第 2 小学校の授業参観を実施した。そしてその日の午後はハムカ大学において，参加者全員でプログラムの反省会を実施した。そしてその日の夜行便でジャカルタを発ち，翌 27 日に成田空港を経由して鳥取大学に戻った。学生たちの振り返りについては本稿巻末の資料「学生レポート」を参照願いたい。

4. インドネシアプログラムの意義と課題

以上のプログラムの概観および学生の受け止め方を踏まえて，ここでは，この海外フィールド演習について，特に鳥取大学側から参加した教員としての立場から，その意義や課題について述べることとする。とはいえ，今回のハムカ大学における海外フィールド演習では，短期間のプログラムにも関わらず，前後の交流等も含め多様な示唆があり，そのすべてを書き記すことは難しい。そこで，ここでは国際交流プログラムとしての今後に向けての意義や課題，そしてプログラムが学生教育に果たした意義や課題に焦点をあてながら，特に記述することとしたい。

4.1 国際交流プログラムとしての意義——大学間交流の実現

まず，中長期的な視座からすると，今回の海外フィールド演習を契機として，大学間の国際交流プログラムが，先方の大学長・学部長らも含めた多くの教員，そして，（レクチャー等に聴講参加したハムカ大学の学生も含め）多数の学生の参加によって実現し，それによって本学・学部とハムカ大学の積極的な今後の交流に向けた基盤作りがなされたことは重要な成果といえよう。

率直に言って，今回の交流に対するハムカ大学側の関心は，我々，鳥取大学側が事前に想定していた以上に高いものであった。たとえば，在インドネシア日本国公使らが，ハムカ大学で行われた交流プログラムの視察にかけつけていたことからも，その関心の高さの一端を窺い知ることができる。今後，鳥取大学とハムカ大学の大学間国際交流が，継続・発展していくための枠組み形成という点で，このことは特に意味があったと考えられる。

このような交流が実現した背景には，ハムカ大学の精力的な広報や準備など多岐に亘る尽力があった。今回のプログラムにおけるハムカ大学の教員，事務方，さらには学生によるサポートは実に献身的で，充実したものであった。なにより鳥取大学側の海外フィールド演習に向けた趣旨を十分に理解し，サポートして下さった点は大きい。想定していた以上の成果を挙げることができたことの背景に，これらハムカ大学側の尽力があったことは特記しておきたい。

4.2 学生教育の場としての意義――多様な個の関係性形成

次に，鳥取大学側の学生らの感想レポートや実際の活動状況を資料としながら，今回の海外フィールド演習が学生教育に与えた影響について考察する。

今回の海外フィールド演習のもっとも重要な成果は，一週間あまりの短期プログラムにも関わらず，国と国，大学と大学，といった既存の枠組みを超えた「個」の結びつきができるほどの関係性構築が，一定程度，実現していた点にあるのではないか。そして，それらの結びつきを通じて，参加学生たちが，自身の暮らし方を問い直し，生き方を反芻する契機となっていたことが重要な意義だと考える。

参加した学生の感想レポートには，そのような「個」の関係性形成という成果の痕跡が随所に表れている（以下，巻末の参考資料を参照）。たとえば，スケジュール終盤，インドネシアの地方都市ガルットへの道中のバス車内では，自然発生的に合唱がはじまる，といった出来事が何度もあった。重要なのは，全員での合唱に加えて，その前後には，「日本」と「インドネシア」といった枠組みによらず，学生個々が，さまざまなポピュラー音楽等を各々歌いあい，教え合う場面が見られたことである。歌だけではない。プログラムの後半では，日本，インドネシアの学生の区別なく，相互に興味があるさまざまな事項について，（ときには教員らも交えて）「語り合う」姿がたびたび見られた。つまり，単に「日本」と「インドネシア」のあいだの交流ではなく，自らの関心事を共有できる相手（しかもそれは常に固定した相手ではない）と，歌い合い，あるいは深く議論し合うような場面が，頻繁に見られるようになっていったということである。そのような関係性は，帰国後においても，facebook 等の SNS を通じて続いており，実施から半年以上が経った本稿執筆時点においても継続している様子がうかがえる。すなわち，学生教育の視点から見て，今回のプログラムで得られた「国際交流」の成果とは，国と国，大学と大学，といった枠組みを超えた「個」のつながりであった。このような意義は，学生によるレポート各所に見て取れる。たとえば，

> インドネシアに友達ができたことは本当にかけがえのないことであると思う。……何かあった時にすぐに飛んでいける距離ではないが，今後インドネシアに行くことがあれば，私を待っててくれる人がいるという事実が，とても私の支えになっている。（３年）

といった感想レポートから，十分にうかがい知ることができるだろう。

むろん，宗教のように，日本とインドネシアというそれぞれの国家のあいだで，大きく異なる制

度的側面も存在しており，両大学生間のすべての障壁が取り払われたというわけではない。しかし，たとえばその宗教にしても，ムハマディヤの大学であるハムカ大学での信仰のあり方のほか，規模や存在する地域条件の異なる複数のモスクでの体験や，さまざまな信仰をめぐる場での経験を通じて，インドネシアの人々のあいだの信仰の濃淡や，宗教との関わり方の違いがあることを学生たちは学びとっていた点に注目したい。

このような個の関係性形成には，学生にとって，自己の生き方，価値観を相対化する機会となり，また，物事をより多面的，多様な考えの中で捉えることの重要性を知る機会となったという意義があるのではないか。単に「インドネシア人」，「日本人」といった一枚岩の枠組みのなかから相手を見るのではなく，他者のそれぞれに異なる生き方，考え方を通じて，自身の考え方，価値観を多角的に捉え直す機会となっていたからである。それは，感想レポートにおける次のような点からも見いだせる。

> 私は何かと向き合って生きてきただろうか？という疑問が湧いた。誰かと，何かと，真剣に一対一で向き合ったことはあるだろうか？……私が見たインドネシアが全てではないはずだ。一つの角度から見た印象だけで，全てを語ることは間違っている。でも，たくさんの角度の中からこんなに素敵な一面が見れたこと，見させていただけたことに感謝の気持ちで一杯である。（３年）

このような記述には，他者との出会いを通じて自身を問い直す姿，さらに，物事を多面的な価値観のなかで捉えることの重要性を学んだ様子が見て取れる。

4.3 成果の要因――社会的背景とプログラム構成の工夫

では，このような意義，個々が自発的に他とつながっていくような状況がもたらされた要因はどこにあったのだろうか。

大きな要因の一つとして，ハムカ大学の学生が，ポピュラー文化などを通じて，元々，日本への関心を比較的，強く持っていたことが挙げられる。大学教育の場はもちろん，日常生活などを通じて培われてきた日本への関心が大きなきっかけとなり，両者が「歌い」，「語り合う」ための土壌ができていたことは確かであろう。特に，今回，インドネシア側から参加した学生の多くが日本語学科の学生であったこと，またハムカ大学の日本語学科には現在，日本人教員が在籍していないことから，そもそもインドネシアの学生の多くが「日本人」に対する興味や関心を強く持っていた側面もあるかもしれない。このような点については，特にプログラムの初めの頃は，インドネシア学生のあいだに，すでに持っていたイメージの中の「日本」を追認していくような姿が見られた部分もあった（同じようなイメージの確認作業は，むろん，鳥取大学の学生のあいだにもあったはずだ）。しかし，先述のように，徐々にプログラムが進むにつれて，想像のなかの「日本／インドネシア」を離れ，個々の学生が互いに近しい興味について話し合うようになっていったことを鑑みると，「外国（人）」への単なる表層的な興味に終わることなく，同時代に生き，人や情報のさかんな行き来のなかで，さまざまな感覚を共有する人々が，国や地域といった既存の枠組みに偏ったイメージによらず，互いに近しい興味・関心を介して文化共有していく姿が見て取れたように思う。

またもう一点，特に鳥取大学生たちに関して述べておくと，プログラムにおいて行われたワークショップでの意見交換や，学生レポートの随所から見て取れた点として，今回参加した学生の多く

が，日常における社会的分断のなかに自身が置かれていることを強く意識しており，他方でのインドネシアの人々の社会的紐帯の強さに，きわめて大きな衝撃を与えたことも重要な要因として指摘できるだろう。インドネシアでは，鳥取大学生が日本での大学生活で容易に得ることが難しかった（難しいと思っていた）「他者との関係性構築」が，言葉を超えて，歴然と目の前で展開していた。加えてその場や関係性に，学生自身も巻き込まれていったのである。そのような状況のなかで，ふだんの生活で他者との関係性を希求しつつも，関係性形成を図ることができなかった分，まるで磁石の極が逆転するように，一気に日本の学生たちはハムカ大学の人々に引きつけられていった。

以上のようなインドネシアの学生，日本の学生が置かれている環境や前提条件のほかにも，プログラム構成という点において，個々の関係性構築を押し進めることを可能とした要因が，いくつか存在したのではないかと筆者は考えている。

第一に，事前準備や帰国後のフォローについてである。今回のプログラムでは事前学習などの機会を通じて，学生がインドネシア社会に関する知識を予め学んでいた。この事前学習が果たした意義は重要であった。たとえば，

> ハムカ大学の女学生たちと一緒にウドゥーを体験し，お祈り用のベールを着させてもらった。……実践してみて，お祈りブレイク（片倉もとこ『イスラームの日常世界』）という表現に納得がいった。お祈りが生活リズムであるムスリムは，それをすることによって仕事や勉強が能率よくできているのだと実感じた。（２年）

といったレポート内容には，事前学習の成果が示されている。すなわち通常の授業ではなかなか扱えない，インドネシアの社会的価値観や社会的制度の相違などを事前に学習する。それらを通じて得た知識や社会的制度の特徴を，一つの「物差し」としつつ，実際の現場で，自らの体験や，相手の心情等を推し測ることができたのではないかということだ（もちろん，事前に用意した知識とは異なる出来事もときには起こる。しかし，そのこともまた，新たな疑問や問題意識へのスタートとなりうる）。日本では特に，多様なインドネシア社会の諸相について知る機会はきわめて限定的であり，このような事前学習は，大きな意味があったと考えられる。

また帰国後も，自身が感じた経験を互いに話し合ったり，レポートとしてまとめたり，さまざまな授業に招かれて発表したりといった経験を通じて，自身の体験や感じた事を他者に伝える試行錯誤がおこなわれた。それによって，学生自身が海外フィールド演習での経験の相対化を図ることができたことも重要であったと考えられる。このことは，単に経験を思い出とするのではなく，そのとき自身が感じたことの意味や，なぜ自身がそのように感じたのかを客観視することによって，自身を取り巻く環境や社会条件に対する批評的意識を持つことにもつながるためである。

4.4 今後に向けた課題

最後に今後に向けた課題について触れながら本項を終えたい。今後に向けた，もっとも重要な課題は，活動の継続に向けた環境整備であろう。まず協定締結等，大学間の制度構築が，その前提となりうると考えられる。ただし，交流のための「形」を整えるだけではなく，両大学の学生・教員ら参加者にとって，求心力のあるプログラムを持続させることが重要であろうことを付記しておきたい。

また，継続にあたっての適切な時期や期間，内容については別に詳しく検討するとして，今後の

プログラムへの参加人数についてのみ意見を述べると，今後，参加者があまりに大人数になることは，プログラム遂行上の妨げとなる可能性があるようにも思われる。もちろん，一方で，より多くの学生が国際交流に参加し，成果を共有できる機会を提供することは重要である。今回もプログラム参加希望者数が，実際の参加者数を上回っていた。しかし，移動やホームステイ受け入れ先準備など，両大学スタッフにかかる負担や疲弊なども含めて勘案すると，今回の参加人数を大きく超えてプログラムを実施することは， 今回得られた意義である，暮らしや生活に根ざした，個の単位での交流を損なう恐れがある。単なる「海外経験」をするだけならば，さほど難しいことではなくなった今日においてこそ，このような深いつながりを得る機会としての意義を失うことは避けるべきだろう。したがって，少なくとも本プログラムに参加した実感からすれば，一つのプログラムを大きくする方向性ではなく，プログラムの数や参加機会を増やして，より多くの学生に参加機会を与えるような方向性での発展に向けた取り組みが必要とされるようにも思われる。

加えて，学生教育以外の国際交流プログラムとしての今後に向けた発展的課題を述べると，今回参加したような学部学生のみならず，大学院生・ポスドク等の若手研究者を含む，研究者の相互招聘等を通じた国際交流を模索していくことも一案であるように思う。すなわち，研究者の「レジデンス」としての要素をプログラムに組み込む可能性である。ハムカ大学では，日本語学科の教員であっても，日本に渡航した経験が無い方々が多くいる。また，来日経験があっても頻繁に日本に渡航できるわけではない。また，日本の教員にしても，学生同様，先方の国や地域に関する知識，理解を直接的に得る機会はきわめて少ない。このような限られた条件のなかでは，両者の理解を最大限図ろうとしても，やはり，その限界がある。また研究機関としての側面を持つ大学機関だからこそ可能な，交流と成果というものもあるはずだ。したがって，より良い教育・研究成果を示しつつ，両大学の関係性を深めていくためには，一定期間，相互の研究者を交換・派遣するような制度構築等も，視野に入れていってよいのではなかろうか。また，大学院生やポスドクなどが，相互の研究を発表し合い，あるいは先方の大学で研究を遂行するようなことが可能となれば，さらに将来，得られる成果も大きくなるかもしれない。この「レジデンス」へ向けた可能性については，他の学内外の国際交流プログラム等を参照しながらの今後の検討課題としたい。

今回のプログラムでは，ガルット郊外においてハムカ大学教員の父親にあたる村人から，かつての日本占領下における植民地支配の経験などを聴く機会にも恵まれた（写真 13）。そこで我々，教員や学生は，植民地によるインドネシア社会や文化の変容，そして戦後の両国の関係について，意見を交わし合った。また同じ村人が，言葉が変容し，一部しか覚えていない「君が代」を，我々と関係を作ろうと懸命に思い出しながら繰り返し歌う姿も目にした。今回のプログラムの意義として挙げた，上記のような「個」の単位での多様な結びつきには，現在，いっそう社会がグローバル化する一方で，人々の文化が，再び国家をはじめとする特定の主体によって誘導されていくような状況が生まれつつあるなかで（岩渕 2007），小さいながらも，それらの「大きな力」に抗うある種の安全弁，バイパスとして機能していく可能性として見ることもできるだろう。そして

写真 13　ガルット郊外で日本占領下の村の記憶を聴く（2013 年 3 月 24 日撮影）

また，個々の学生にとっては，日常の固定化した社会制度や人間関係で身動きが取れなくなるような状況のなかで，「私を待っててくれる人がいるという事実が，とても私の支え」となっていくに違いない。

5. ハムカ大学側からのプログラムの成果や評価

このプログラムを振り返ってみると、ハムカ大学側としてもこのプログラムの今後の継続を強く願うような充実した内容となった。ここではハムカ大学の教員や学生の目に写った鳥取大学の学生像について触れてみたい。

日ごろほとんど接する機会のない日本人との交流は，ハムカ大学にとっては大変貴重で収穫の多いものであった。言語によるコミュニケーションでは時折不都合は発生したものの，精神におけるコミュニケーションは大変実りあるものであったと考える。このプログラムは全体的に非常にうまく実施された。

このプログラムをとおして，ハムカ大学は，宗教，文化，社会生活から歴史に至るまで幅広くインドネシアを鳥取大学の学生たちに伝えることを試みた。初日は，ジャカルタ市内のエクスカーションであった。翌日は鳥取大学の 2 名の教員を迎えて国際セミナーを開催した。聴衆の関心も高く，成功裏に終えることができた。その後，私たちは西ジャワのカンプン・ナガ村を訪問し，原始的な文化とともに生きる村の生活を経験することもできた。

このプログラムを通してハムカ大学の教員と学生たちが直接日本人と接して発見したことは，日本人の勤勉さ，規律正しさとインドネシアに関する旺盛な好奇心だった。それらの特徴はハムカ大学にとってまさに驚くべきものだった。たとえば，日本人たちは時間の使い方をとても大切にしていた。時間にあまり余裕がない時でも日本人たちは予定どおりにバスに乗り込んでいることが多かった。またカンプン・ナガ村での初日に，翌日は朝 7 時に村の中心に集合ということを確認しあったが，実際日本人たちはその時刻には集まっていた。このように時間を大切にしたために，このプログラムの様々な計画を予定どおり実施することができたと考えている。

日本人たちとともに過ごした時間は大変楽しいものだった。言語的障壁は存在したものの，ともにいる雰囲気そのものが楽しさに満ちていた。日本人たちは旺盛な好奇心をもっており，初めて出会ったインドネシアの人々に敬意を表してくれた。そのようにプログラム全体が楽しさに満ちていたため，最終日の別れの際は参加者たちは深い悲しみを経験することになった。

このプログラムの課題としてまず挙げられるのは，総じて時間が足りなかったということだろう。インドネシアでは他にも訪問すべき場所は多々存在する。また電車やトランスジャカルタという市内のバスなどの交通を利用することをも経験すべきである。中央ジャバなど，ハムカ大学と鳥取大学双方にとって有益な場所もまだ他にたくさんある。

また，このプログラムが日本で実施できるようになれば新たな興味深い展開になるだろう。ハムカ大学は日本のコミュニティ，社会，そして文化を知りたいと思っている。そのようにしてこのプログラムが継続していけば幸いである。

このプログラムを振り返ってみて，ハムカ大学側のこのプログラムの評価は次の言葉に表されるだろう。「幸福，興奮，楽しさ，悲しみ，そして驚愕」――鳥取大学の人々との再会を心待ちにしている。

6. おわりに

6.1 今後の展望――ハムカ大学より

今日のグローバルな教育分野では時空間を制限する境界は存在しない。換言すれば教育は特定の範域内で行われるものではなく，世界規模でオープンになされるものになったということだ。

「世界水準の大学へ」というスローガンを掲げ，ハムカ大学はグローバルな教育の発展による諸課題に呼応していきたいと考えている。諸課題に応えていくためには，国際的な文脈において学問的能力を高めることが重要であろう。このような理由で，ハムカ大学は，常に海外留学を奨励し，海外の機関と学問的ネットワークを形成するということに常に開かれてきた。これが「世界水準の大学へ」というスローガンの具現化につながっていくだろう。

近年，そのようなハムカ大学の努力は鳥取大学との交流に向けられており，鳥取大学はハムカ大学の教育的発展に積極的に応えてくれている。その最初の交流は 2012 年 4 月にハムカ大学で実施された国際セミナーであった。鳥取大学がこのセミナーに参加したことは，その後の大変建設的な展開をみせ，2013 年 3 月のプログラムの実施へとつながっていった。このプログラムを実施したことは，双方の大学がこれから協力しあって学術的プログラムを発展させていくということが前提である。両大学の学術交流協定および学生交流協定は 2013 年 10 月に締結された。これからはこの協定にもとづいた交流プログラムが展開されていくことを願うものである。

6.2 今後の展望――鳥取大学より

このプログラムは「等身大のイスラームに出会う」という標語を掲げて実施されたパイロットプログラムだった。学生たちは「異文化に触れたい」「イスラームを学びたい」「海外に行きたい」「インドネシアのことを知りたい」「外国語を修得したい」などというそれぞれの理由でこのプログラムに参加した。概して当初の動機付けは上述のような「外向き」のものであり，それぞれの参加者は「異文化」に対する好奇心に満ちあふれていたと言えよう。

ところが既に考察してきたように，実はこのプログラムの最大の効用は自分と同世代のイスラームの学生との出会いをとおして，これまでの自分の生き方や自分が生きてきた社会のあり方を深く振り返るきっかけを得たことだったと言えるのではないだろうか。それは換言すれば他者との出会いをつうじて自己と出会い直す機会を得たということである。ある 3 年生は，次のようにこのプログラムでの経験を端的に振り返っている。

> 私が見たインドネシアは温かく，笑顔にあふれていた。もしも日本が心の広さや，思いやりの度合いで人が評価されるような国になれば，もっと皆がのびのびと生きやすい環境を築くことができるのではないかと，夢みたいなことを考えてしまうほどであった。そんなことを思ってしまうほど，私がインドネシアで出会った人々はみんな素敵な人たちにばかりだった。私の生きてきた世界だけが常識ではない。もっと自然に，もっと素直に物事を受け入れても大丈夫なのかもしれないと，気持ちが少し軽くなった気がした。インドネシアで過ごした一週間は私の中でとても貴重な経験の連続だった。多くの感情に出会い，戸惑うこともあったが，そのひとつひとつがこれからの私を支えてくれる気がする。
>
> ただ，私が見たインドネシアが全てではないはずだ。一つの角度から見た印象だけで，全てを語ることは間違っている。でも，たくさんの角度の中からこんなに素敵な一面が見れたこと，見させていただけたことに感謝の気持ちで一杯である。たくさんの笑顔と，たくさんの優しさ

をくれたインドネシアの方々に本当に心から「ありがとうございます」と言いたい。そして，いつかまた必ずインドネシアを訪れ，大好きなみんなに会いたいと思う。

この記述は，このプログラムの本質的な特徴をうまく表現している。学生たちが感じたインドネシアの人びとのあたたかさ，日本と違う価値観や人間の関係性のあり方，そしてそれを鏡とした自己の相対化が凝縮された文章である。注意すべきは，ここで述べられている「インドネシアの人々」は自分が事前に想定していた人たちとはまったく異なる「他者」であったということだろう。

「他者」について現代アラブ文学を専門とする岡真理は次のように述べている。

> 存在を忘却された者たち。その者たちが，私が想像するのとはまったく異なった様態で世界に存在しているというその可能性を――言い換えれば、世界の別の可能性を――，私の思考の外部へと括り出されてしまう者たち。そのような者たちこそ「他者」，ではないだろうか。（岡 1998:96）

無意識のうちに自分の思考の外に括り出してしまい，その人たちの生き方や世界の在り様など微塵も想像したことがなかった他者たちにうっかり出会ってしまったのが，今回のプログラムだったとも言えよう。その意味では日本の学生たちは予定どおりにイスラームやインドネシアに関する知識の量を増やすことはあまりできなかったかもしれない。しかし，それまで想像もしたことがなかった同世代のイスラームの友人の世界に，少しではあるが確実に身を置き，それを経験することができた。この経験はこれから学生たちがそれぞれの人生を生きるための財産になっていくだろう。その友人たちとの出会いとそれを鏡にした自己との出会い直しは，これからこの地域や社会を担っていく学生にとって重要な糧になっていくに違いない。

参考文献

Burhani, Ahmad Najib, 2013, “Liberal and Conservative Discourses in the Muhammadiyah: The Struggle for the Face of Reformist Islam in Indonesia,” Martin Van Bruinessen ed., *Contemporary Developments in Indonesian Islam*, Singapore: Institute of Southeast Asian Studies, 105-144.

外務省「各国･地域情勢　インドネシア」http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/indonesia/data.html#04（2013 年 9 月 29 日ダウンロード）

岩渕功一, 2007,『文化の対話力ーソフト・パワーとブランド・ナショナリズムを越えて』日本経済新聞出版社.

岡真理, 1998, 「『他者』の存在を想い出すこと」『みすず』No. 450: 91-100.

田川公太朗・永松　大, 2010,「韓国江原大学校における『海外フィールド演習』のこころみ」『地域学論集』7：323-336.

筒井一伸･片垣亜弥子･仲野誠･小玉芳敬･ブイ　ティ　トゥ･レ　ディン　トゥアン･チュオン　ディン　チョン, 2013, 「効果的な『海外フィールド演習』の実施に向けた課題――ベトナム・トゥアティエンフエ省でのパイロットプログラムを通して」『地域学論集』10(1): 63-83.

資料

「2012 年度 海外フィールド演習インドネシアプログラム」に参加した鳥取大学地域学部学生 5 名のレポート

資料として，このプログラムに参加した鳥取大学地域学部の 5 名の学生たちが帰国後の 2013 年 4 月 15 日に提出したレポートをそれぞれ抜粋して掲載する。

1. 地域学部地域政策学科 3 年生

私の感じた、私が出会ったインドネシア

今回初めてインドネシアに訪れた。しばしば日本との違いを感じることがあった。私が感じたものが本当のインドネシアではないと思うし、ほんの一部分であると思う。そのことを踏まえたうえで、今回のフィールドワークで出会ったインドネシアで特に印象的だった 3 点について述べたいと思う。

私がまず最初に驚いたことは、ハムカ大学ですれ違う人みんなが私たちに、にっこりと微笑んでくれたことだ。私たちは部外者であったにも関わらず、とても温かく受け入れてもらった感覚があった。ショッピングモールでインドネシアの学生が後ろにいた人に気がつかず、ぶつかってしまった時ですら、その相手はにっこりと笑っていた。日本では、見知らぬ人とすれ違う時、にっこりと微笑むことはほとんどないことで、他者を視界に入れないことの方が多いと思う。それは、他者と接することに煩わしさを感じていたり、面倒なことが起きないように警戒していたりするからだと思う。インドネシアでは、疎外感は全くなく、興味本意があっただけなのかもしれないが、とても温かく歓迎してもらったと思う。この様にフレンドリーで見知らぬ日本人を受け入れる姿勢は、インドネシア特有のものなのか、イスラーム社会特有なものであるかは分からない。しかし、私が出会った人達は、私が感じたインドネシアはこの様な印象だった。

次に、インドネシアの挨拶がとても素敵だと思った。目上の人に対しての挨拶で、目上の人の手の甲を、額や頬、鼻にくっつけるものがある。私より小さな子どもは、私に対してこのような挨拶をしてくれた。この挨拶をされた時、したくてしたわけではなかったかもしれないが、その子どものことをとても愛しく感じた。私たちの先生に挨拶するインドネシアの学生を見ていても、とても可愛らしく、相手に敬意をはらっていることが伝わっていきた。敬意をはらっていると同時に、親しみも感じられる挨拶の仕方だと思った。日常生活に取り入れることは難しいと思うが、このような挨拶があり羨ましいと感じた。

最後に、セミナーや移動中のバスの中で感じたことが、インドネシアの学生の明るさや反応の良さである。セミナーではドッとした笑い声が起き、歓声も大きかった。バスの中では、インドネシアの学生はいつも笑っていて、たくさんの歌を歌ったり踊ったりした。コミュニケーションをとることが難しいことが多かったが歌によって繋がることができたし、誰かが外れたりすることなく、もれなくみんなで笑顔でいることができた。日本ではバスの中では寝ていることが多いが、寝させてくれない、放っておかない雰囲気がいつもあった。疲れている時は少し大変だったが、それ以上に楽しかったし、彼、彼女らのおかげで、限られている時間を濃厚に過ごすことができたと思う。私自身は疲れているならば移動中に仮眠をとり、時間をしっかり守って無駄な時間がないようにす

るなど、とても合理的な考え方をしていると思うが、それは自分のことや損得を優先に考えていて、とても悲しいことなのかもしれないと感じた。無駄なこと、無駄な時間なのかもしれないが、その時にしか、生まれないものがあったということに気づかされた。インドネシアの学生を見ていて、彼、彼女らは自分達の感情や反応を表現する力を持っていると感じた。声を発することで、体全体を動かすことで、表情を一瞬一瞬変化させることで、自分達の気持ちを素直に表現していた。その姿はとても輝いていて魅力的だった。この様に表現できる人は日本では少ないのではないかと思う。セミナーや授業中はシーンとしていることが多いと思う。

なぜインドネシアと日本ではこのような違いがあるか考えた時、インドネシアでは感じたことや考えたことを output するまでの時間が短く、日本では output するまでの時間が長いのではないかと思った。インドネシアでは、自分の感情や考えを素直に包み隠さず出している印象がある。一方、日本では、外に発信するまでに、人の目を気にしたり、「すべる」ことや「おち」を気にしたりした上で、自分の考えや感情を出していると感じた。インドネシアでは、寛容で安心して自由に発言できる、空気をよまなくていい雰囲気があるのではないかと思う。日本では、空気を読むことが大切に思われている部分があり、常に人の目を気にしなければならない。自分が他者からどう見られているかをとても気にする。自分らしさが自由に発揮できない雰囲気があり、もし、自由に発言すれば、空気が読めないと言われることがある。日本の他者を思いやる気持ちはとても素敵だと思うが、その思いやりが、過剰の気遣いや他者からの目を気にすることに繋がっているような気がした。否定や排除の前に一回受け止める余裕、準備があるのがインドネシア、無いのが日本なのかなとも思った。

多様なイスラム

インドネシアに来るまでは、無宗教である私にとってはイスラム教は厳しそうで、モスクやジルバブなどは神聖なものなどのイメージを持っていた。実際は、ある部分では自分達との近さを感じ、ある部分ではイスラム教の緩やかさを感じ、ある部分では私たちになくて、ムスリムに共通するものを感じた。まず、自分達と近く感じた部分は、モスクで祈る前に体を洗うこと（ウドゥー）である。神様の前に出る時は身を清めるという感覚はとても理解できる。日本でも身を清めるために滝を浴びることがあるし、実際洗い方を教わりながら体を洗わせてもらったが、とても清々しい気持ちになれた。ウドゥを経験していなかったから、自分達と違うなと距離を感じたままだったと思う。

次に緩やかさという部分は,インドネシアの友達のジルバブに対する考え方から感じた。常に髪を見せないようにしているかと思っていたら、旅行の時はしていなかったり、ジルバブで汗を拭いたり、黒いジルバブに白い歯磨き粉がついてしまったお茶目な様子があったりと私が想像していたものとは違っていた。ジルバブひとつとっても、個人によって考えに違いがあるのだと気付いた。

また、私たちにはない、ムスリムに共通することは、神様との約束、義務についてである。「他人をもてなすことが義務」というような考えがあり、ハムカ大学の先生と学生がプログラムの感想を話した時、ほぼ全員が、「間違いがあったりきちんともてなせていなかったら、すみません」というようなことを口にしていた。今回のプログラムでハムカ大学の皆さんはとても親切にしてくださってこれは１人１人の思いやりからであると思うが、それに加えて全員が共通して持っている思想が関係していたのかなと思った。また、コーランを聞いた時、響きがとても美しく、清らかなものであるような印象を受けた。コーランをよむ人の間合いや息継ぎ、視線全てが私を魅了し、その人から目が離せなかった。コーランを聴きながら、コーランについて学びながら生きてきた人達は、当

然私と全く同じ人間ではないことを実感した。インドネシアの人々と私の間には、確実に違う何かがあり、体や頭に染みついているものがあると思った。

怖さ

今回交流したハムカ大学の学生の多くは、日本語学科であったため日本に関心があったり、好意を持ってくれている人が多かった。それもあってかとてもフレンドリーに接してくれたし、危険な場面もなかった。しかし、怖さというか危うさ、一歩違えば怖いものとなってしまうような感覚は持った。インドネシアでは挨拶の仕方が日本とは違うため、見よう見まねでやっていた。モスクの二階でコーランを教えている先生に挨拶する時、前の人と同じように手を触れようとすると、避けられてしまい、胸の前で手を合わせる挨拶しかしなかった。この時、私はイスラムに対して勉強不足なので、差別をされたように感じショックを受けた。しかし、この後すぐ先生がイスラム教でのルールを話して下さり、手を触れなかったことについて説明して下さった。これはほんの小さなことであるけれど、このように相手のことを知らないことが、誤解をまねき、相手に対して少しでも嫌悪感や不信感を抱いてしまう可能性があるということを知った。今回経験したことが戦争や差別など過去の歴史にあるもの、現代にある諸問題も、無知から誤解が生じ、複雑、混乱、または取り返しのつかない状況になった結果なのではないかと思わせ、恐ろしくなった。それと同時に、知ることが、他者との摩擦や誤解を無くすということを実感した。自分と関係のないと思われる世界のことでも、どのような分野に対しても、知っていこうとする努力をしていきたいと思った。

私の考え方、生き方のヒント

今回のプログラムに参加にする前に、台湾に行ってきた。台湾とインドネシアで共通に感じたことは、日本のことをよく考えてくれているということだ。台湾では、東北の震災の起きた日、お世話になった台湾の大学が3月11日には胸一日も早い復興を願う黄色のリボンが私たちに配ってくれた。今回のインドネシアでも、東北のボランティアに行ってきたという学生に出会った。私は日本に住んでいながらも日本国籍を持っていながらも、一度も東北に行ったことがない。ましてやスマトラ島沖地震の時にインドネシアに行ったことがあるわけではない。「ボランティアに行くべきだ、行くことがいい」ということを言いたいわけではなくて、いかに自分が自分の国のこと、ましてや他国のことをしっかりと考えていない、あたかも自分とは全く関係のないことのように、関心を持っていなかったということ気づかされた。

また、Kampung Bandan や Kampung Naga へ訪れた際にはたくさんのことを教えていただいた。私が持っていなかった考え方や生き方にショックや羨ましさを感じ、また、私の背中を教えてくれるような、支えてくれるような経験をさせてもらった。

Kampung Bandan ではテレビで見たことのあるスラムが広がっていた。そこではまず炎天下にさらされてさらに匂いのきつくなったゴミの山が待っていて、その先には多くの家々がぎっしりと建ち並んでいた。継ぎはぎだらけの家があったり、地面はぬかるんでいて灰色の水たまりがある部分があったり、とても綺麗で住みやすいとは言えないようなところだった。しかし、可哀想という思いは全く持たなかった。それは底抜けに明るい子ども達の笑顔、村の人の優しい微笑みがあったからだと思う。この村の人達は今の生活に満足しているのか、そうではないのか分からないが、彼らの明るさや笑顔からは、不安で仕方ない、絶望的だというような心情は感じられなかったし、今日本に帰って彼らの写真を見るとこちらまで元気をもらうほどである。この村で感じたことは、自分が、

日本の社会が幸せの価値をお金や安定、成長などによって見出していて、固定されたたった一つの幸せ像しか持ち得ていないということだ。自分がとても寂しい人間のように思えた。幸せの形ってひとつではないのだなと自分の目で見て確かめることができ、実感することができた。自分の持っている悩みや考えていることがとてもちっぽけなことに思え、心配や不安になるばかりではなく、もっと楽しく笑顔で生きていけるはずだと思った。

Kampung Naga は電気の通っていない村である。電気のある、電気製品の中に囲まれて生活している私にとって､電気のない生活は想像できなかった｡この村ではホームステイをさせていただき、実際に家の中を拝見させて頂いた。大変そうだなという思いよりも、素敵だと感じた。それは釜戸や食器棚など本当に必要なものが厳選されて集約されているようで、欲にまみれてギラギラとしておらず、シンプルな暮らしが見れたからである。電気のない生活は想像できなかったが、ランプの明かりが心地よく感じた同時に、日本が明るすぎであることにも気づいた。電気に依存した生活を見直したいと思ったし、1 週間に 1 回でもキャンドルで過ごす日を作ってもいいかもしれないと思った。

ホームステイ先の方や村のリーダーからお話を聞かせていただいた。彼らの話を聞いていて、まず感じたことは、私の考え方、生きてきた環境と大きく違っているということだ。私のように欲を持っておらず､物事を簡単に考えていた｡だから村では喧嘩がなく､村は 60 年前と全く変わらない。家の人に､幸せを感じる時はどんな時かと尋ねるとスポーツをしている時だと答えてくれた｡正直、私が期待していた、予想していたことと、彼らの話を違っていた。村には改善しなければならない問題があるだろうと思っていたし､幸せを感じる時も､もっと特別な瞬間だと思っていた｡しかし、実際彼らの考え方、生き方はとてもシンプルなものだった。かつ、食材なども自分達で作り、足りないものは他から補い、支え合い、電気に頼らない分手間もかけてゆっくりと丁寧に生きているようだった。このような生き方が、私にできるのか、日本でできるか分からない。しかし、インドネシアの村で、自分とは違う考え方、生き方を持った人達と出会ったことで、日々の生活に彼らの生き方を意識したり、取り入れたりすることが可能だと思う。彼らの生き方から学んだことは私の人生をより楽しいものしてくれたり、支えてくれるものになると思う。

そして最後に、インドネシアに友達ができたことは本当にかけがえのないことであると思う。一週間ずっと私たちのそばにいてくれた。道路を歩く時は車から私たちを守るように車側を歩いてくれたり、お土産選びに真剣に付き合ってくれたり、何気なくおしゃべりしている全ての瞬間で私は幸せだなと感じていた。何かあった時にすぐに飛んでいける距離ではないが、今後インドネシアに行くことがあれば、私を待っててくれる人がいるという事実が、とても私の支えになっている。

最後に私は皆さんに本当にありがとうございました！と言いたいです。皆さんには本当に感謝しております。先生達の笑顔は私を安心させてくれました。そして、とてもフレンドリーに接して下さいました。私は先生方のような教師になりたいと思います。学生の皆さんはいつも明るいです。皆さんの笑顔には元気をもらいました。皆さんが突然ダンスをしたり歌い出すのはびっくりしましたが、そのようなところも大好きです。皆さんとはもっとたくさんお話したかったです。インドネシアに行った時、日本に来た時は、もっとたくさん話をしましょう。そしてまた一緒にゲームをしたり、歌ったりしましょう。皆さんは私の大切な友達です。また必ず会いましょう！

2. 地域学部地域文化学科 2 年生

貧しさとは？

まず初めに、Kampung Bandan についてである。先程も少し述べたように、スラム街というものは知っていても、自分には関係のない遠い国の出来事だと思っていた。スラム街について凄い状況だな、可哀相、どうにかしてあげたいと思ってはいても実際を知らない私はそこに住む人々の気持ちや生活など何も考えていなかった。

大学を出発する前に学生や先生にマスクはあるかと聞かれ、ないと答えるとマスクを渡された。これからどこに行くのかもよくわかっていなかったので、インドネシアは車やバイクの量が多いため空気があまりよくないのかと特に何も考えていなかった。村に着いて、そのマスクの意味が分かった。ゴミの量・匂い、日本ではごみ処理場でしか見ないものである。「これは本当に現実なのか」と、実際にその状況を目の当たりにしても受け入れられなかった。こんな中でとても多くの人が暮らしているという事実が、理解できなかった。ジャカルタは私が思っていたよりも都市で、インドネシアは発展していると思った反面、こんな場所もあるのかとその格差は衝撃的であった。線路を隔てて見えるものは、右側には高層ビル群、左側にはゴミばかりの村なのだ。都市があんなに発展しているのになぜここはこのような状況のままなのか。

村を歩いていくとたくさんの家族や子供たちに出会った。話しかけると誰もが笑顔で、快く写真も撮らせて下さった。子供たちに至っては、本当にパワフルで一度話すとずっと後をついてきて、気が付けば村のあちこちから子どもが集合していた。笑顔がとてもキラキラしていて言葉がわからないのに何かを楽しそうにずっと話しかけてきた。ただそれだけでなんだかとても愛おしくて仕方がなかった。それはただ単に私が子ども好きだから、というだけではないだろう。私は今まで、スラム街に住んでいる人は可哀相だと思っていた。しかし、出会った人々は誰もが笑顔でおだやかに自分たちの時間をゆったりと過ごしていた。そこには私が思っているような可哀相なんてものは存在していなかった。確かに生活環境や経済面では厳しいものであるが、人々はきちんと自分の環境を受け入れていて、満足はしていないかもしれないが、ゆったりと自分たちの生活を営んでいたのだ。

それを考えると、私はあの村をスラム街と呼んでよいのかわからなくなった。日本に帰って、この村について説明するとき、「スラム街に行った」と言うのに抵抗があった。私が見たものはきっと日本人の多くが抱いているスラム街とは違うものだったからだ。スラム街と言ってしまうだけで、聞いた人は私が話すことを聞いても固定概念ができてしまうのがとても嫌だった。あの人たちは貧しいかもしれないけれど、温かくて楽しそうだった。果たして私があの人たちみたいに貧しい状況であんな風に過ごすことができるだろうか。きっとあの村の人々は凄いパワーを持っている。あの人たちが国に対してデモを起こしたら物凄い勢力になるのではないだろうか。しかし、きっと彼らはそれに気づいていない。欲がないというか、その暮らしを受け入れていてそれ以上を多く望んでいないからである。しかし、それが良いことだとも思えない。自分たちの子供もそのように暮らしていかなければならないと思うと、どうにかしたいとは思わないのだろうか。自分たちではどうしようもできないと言ってしまえばそれで終わりだが、こんなに素敵で強い力があるのに、もったいないと私は思うのだ。こんな風に私が思うのは何故なのか。私は今まで才能やすごい力を持っていながらそれに気づかずに持て余している人を何人か見てきた。私にはないその力や才能が私にあればもっとうまく使うのになど思うこともあった。羨ましいという気持ちが一番大きいと思う。私は私で、他の人は関係ない。自分がこうあればいい。と思う半面できっと私は誰よりも他人と自分を比べて、他人を気にしていたのだ。そんなことをあの村でも感じていた自分が悲しい。彼らは他人と自分を比較なんてしていないからそう思わないのかもしれない。欲や向上心がないというのとは

まるきり違うものであるのだ。

不自由の中の自由

モスクでコーランを勉強している子供たちやウドゥという祈りの前の準備やお祈りを見学・体験して、やはり自分が思うイスラムはイメージでしかないのだと体感した。コーランの勉強会で私だけでなく日本の学生はかなり違和感を覚えていた。「イスラム社会に生まれてきた以上ムスリムになるのは当然で途中でムスリムでなくなることは許されない。ムスリムであることが幸せであるのだからそれを止めるのは考えられない。」とコーランの先生はおっしゃった。この言葉を聞かなければ私はきっとイスラム教についてきちんと考えなかったのではないかと恐ろしくなった。ムスリムであると知ってはいても、私が出会った人々は私たちと変わらないごく普通の同年代の友達や面白い先生であった。そのせいかイスラム教の存在を忘れていたのだ。

ムスリムになるしかないと聞いた時、選択権がないということにとても疑問を抱いた。自分の人生なのだから自分で決めるべきであると思ったからだ。世の中には、色々な社会がありどれが一番幸福で住みよいものなのかはわからないが、この世界には選択権というものがあるはずである。人権だとか自由だとかが取り上げられる今の社会でこんな風にイスラム社会は続いてきたのか。何よりも私自身、人に決められていきたくないという思いが強いことに気が付いた。私は私のしたいように生きたいし､他の人もそう生きるべきだと思っている｡私の家族はみんな同じような道を辿り、同じような生き方をしてきた。私にはそれが幸せそうにも楽しそうにも見えず、こんな風になりたくないと思ってきた。だから人と違うような生き方を望んでいるのだと思う。外国へ行きたいという強い思いもそういった思いから来ているのかもしれない。そんな私にとって、彼らはとても不自由で可哀相に思えた。バンダンで出会った子供たちとは全く逆の印象である。しかし、彼らは幸せだと言う。他の世界を見たとしても、彼らはそう答えるのだろうか。

そもそも（今更かも知れないが)、大前提として「幸せ」とはどういうものなのか。インドネシアで出会った人々は〝今〟という時間を大切にしているように思えた。これから何をするとか明日はどうするかとか後のことはいちいち考えずに、今をどう過ごすのかということを考えていた。日本ならば、スケジュールを細かく決めて、就職も将来のために安定した職に就いて・・といった感じで、大抵〝今〟ではなく〝未来〟のことを先に考える。今までの私も先のことを考えて行動するようにしてきた。しかし、今という時間をあんなに楽しそうにゆったりと過ごす彼らを見て、将来や未来といったものが本当に大切にすべきものなのかわからなくなった。それは、いかに私が普段日本で時間や周りの目にとらわれて生きているかということであった。考えてみると、毎日何かに追われて、アルバイト先と学校と家だけを往復してお金や単位は得られても、自分の中に残るモノは何もない気がした。毎日何かがあって、毎日忙しくて、はたから見れば充実しているようだが、これは本当に必要な忙しさなのだろうか。なんとなく今やるべきこと、目の前にあることをこなして生きているだけなのではないだろうか。「今を生きる」この言葉は私の人生のモットーである。しかし、私はこの言葉の意味をはき違えていたのかもしれない。私にとっての「今を生きる」とは、現実逃避にも似ていて、やることはあるけど後に回してやりたいことをやり、立ち止まって考えずに突き進むという、未来も過去もない一瞬のものだった。インドネシアに行って感じた「今」というのは、それとは違うもので、もっと自由で充実していて未来へ繋がっていくものだった。

Aim 先生のお父様のお話の後、何人かで今の日本とインドネシアの関係について少し話した。その時に、「日本人は、何故日本はあんなに酷いことをしたのに今日本を好きでいられるのか。とよく

言う。でも、私たちにとってそれは過去であり今とは関係ない。大切なのは今、これからの関係性である。」というようなことを言われた。私は、ハッとした。今を生きるとはこういうことなのだ。インドネシアでは、全くスケジュール通りには進まないし、まずスケジュールを誰も知らないという状況で、何を待っているのか、何をする時間なのかわからない時間がたくさんあった。日本ではまず考えられない。本当に自由である。のんびりとその時間を生きていて、ただそれは一瞬一瞬といった区切られたものではなく、ゆっくりと続いているものなのだ。

明日もし、死んでしまったら？自分のしたいことを押し殺してまで将来のために、安定のために、努力する必要はあるのだろうか。明日が当たり前に来るといえるのか。今一緒にいる人にもう会えないとしたら？そう考えると、今しかできないことを見逃さずに、大切にしなくてはいけないと思うようになった。もちろん、幸せとは一人一人感じ方が違うものではあるだろうが、今までと違うものを大切にしてみることで、他の幸せが見えてくるかもしれない。

インドネシアで私は何度かひまわりの写真やひまわりという言葉を目にした。それを見た時は暑い国だしひまわりはどの国でも人気なのだと単純に思っていた。しかし、良く考えてみるとひまわりは「崇拝」などの花言葉もあり太陽を示すものでもある。インドネシアの学生の携帯電話の待ち受け画面がひまわりであったことや日本語学科の掲示板のタイトルも「ひまわりのかべざっし」であったことに何故ひまわりなのか気になっていたが、もしかしたらイスラム教と関係があったのかもしれない。（勝手な推測にすぎないが）こんなところにも私とは違う考え方が隠れていたのかもしれない。

彼らが信じる神とはなんなのか。私は神の存在を信じている。けれど私の神は唯一無二の存在ではなく、ただ人間をみているだけである。神は私たちを助けてはくれない。何故なら、今まで自分がつらい時や悲しいとき助けてくれたのは家族や友人であったからだ。そして何よりも自分で乗り越えるということが大切だった。自分自身が強くなくてはならなかった。だから私は神を信じてはいても祈ることはなかった。自分でどうにかするしかないのだ。人間関係でもそうである。私は人に依存することが嫌いである。依存してしまうと自分が自分ではいられないような元に戻れなくなってしまうような感じがするのだ。だからきっと私はたくさんの人と知り合っても深く繋がる人は少なかったし、相手の反応が薄いと自分から繋がろうとしなかったし、避けていた。私はこんな人間で、こうあらなくてはいけないと思っていて、他人からみても自分自身でも「キャラじゃない」と思われるのが許せないのだろう。自分の芯が変わることが怖かったのかもしれない。

残念ながら私はこういったシリアスな部分についてインドネシアの学生と話すことが出来なかった。それは私の考えがその時にはそこまで及ばなかったことと、あまりにも会話が楽しかったからである。そのため、こういった部分をどのように感じているのかわからない。しかし、私が思うに、神という存在を信じることで自分という存在は確立され、許される。そうなれば、自分は自分で、ありのままでよい。そのため、他人を気にして自分が強くいる必要はなくなる。自分や相手の弱さを受け止め、互いを助け合うことができる。だからこそ、彼らは人と人の絆が強いのではないだろうか。他人に認められ、受け入れられるのは大変で、社会の中で自分という存在はちっぽけである。しかし、神が自分を認めて受け入れてくれていると思えれば、確かに自信が持てるような気もする。それこそ、他人に縛られない自由な目で社会を感じられる。「不自由の中に自由がある」と最終日の振り返りで話が出た。その時の私は頭の中パニック状態で理解できなかったが、そういう意味だったのだろうか。インドネシアの人々からしたら、よっぽど私たちの方が不自由に見えるのかもしれない。

〝つながり〟

さて、これまですでに何度もインドネシアの人々の繋がりの強さや人間性について述べてきた。インドネシアの人々は、とても笑顔が素敵で明るくて陽気で〝今〟を生きている。

それは、インドネシアではなく、日本に帰ってきてからの方がより強く感じている。何故なら彼らはあんな短期間にもかかわらず､SNSやE-mailを通して､私たちの関係を持続してくれるからだ。それも、本当に多くの人々が。日本であれば、続いたとしても三日くらいで、一度終わればもうあまり連絡をとることもない。しかし、インドネシアの人は返さなければまた来るし、返していてもまた来る。ずっと一緒に活動した人だけでなく、一度写真を一緒に取っただけの人や一回も話してない人や会ってもいない人からも来るのだ。すごい社会である。これが、行く前に先生のお話や学習で言われていた「ほっとかれない社会」というものだと実感した。

そして、彼らは感謝の気持ちや人を思う気持ちが強い。他人を気遣い、素早く行動するということが体に刷り込まれている。少しでも静かにしたりあくびをしたりすると「大丈夫？疲れた？」と声をかけ、何かが足りない時や困っている人がいる時、すぐに気付いて行動していた。きっと当たり前のことなのだろうが、簡単にできるものではない。私が見た限り、知らないふりや見てないふりをする人はいなかった。日本ではよくあることで私自身がそうすることが多い。それは自分のことしか考えていないからだ。面倒なことにはなるべく関わらないようにしている。インドネシアに行って、私は自分がどれだけ自分勝手で小さくて情けない人間か思い知らされた。彼らの温かさはとても居心地の良いもので離したくないと思うものだった。出会って数分で離れがたいと感じることは日本では経験したことがなかった。特に、先生や婦人、ホームステイ先のお母さんといった女性は本当に包容力に溢れていてその温かさに涙が出そうになるほどだった。言葉が上手く通じなくても、笑顔やハグだけで、とても近くにいるような不思議な感覚だった。

彼らに関して印象に残っていることはまだある。インドネシアの人は歌が大好きでいつも歌っていた。そして、歌が上手であった。私はいくつかインドネシアの歌を教わった。その中でもすごく心に響いた歌がある。歌のタイトルはわからないが、歌詞が「ここでたのしい、あそこでたのしい、どこでも心がたのしい」という歌である。歌詞を聞いただけでも楽しくて嬉しくなる歌である。この歌はインドネシアのこどもたちがよく歌う歌だそうだ。それが何よりも素敵だと思った。この歌にこの国の人々の性質がすごく詰まっている。誰もが知っているそうで、バスの中でみんなと歌ってから離れなくなってしまった。日本でもふと思い出して口ずさむと本当に楽しくなってしまう。にやにやして怪しい目でみられるかもしれないので、うかつに口ずさめない。インドネシアでの体験や出会った人々が素敵すぎて、思わず「インドネシアに帰りたい」と呟くほど、帰国後の私はインドネシア中毒である。

これからの私

こんな素敵な体験をして、たくさんのことに気づかされた私がこれからすべきこととより考えていくべきことがいくつかある。やるべきことの１つは、英語である。いくら言葉が通じなくても通じている気がするといっても限界がある。自由に会話できないとやはり大変である。聞きたいことも上手く聞けず、言いたいことも上手く言えなくてもどかしいことばかりだった。これからもっと色々な国へ行って多くの人と出会いたい私にとって、英語が一番大きな壁である。インドネシアにももちろんまた行く予定なので、次こそは上手く会話できるようにならなければいけない。

２つめは、人との出会いを大切にするということだ。私は最初に知らない人に話しかけることは

できるが、関係を続けていくことが苦手だという事に気が付いた。しかし、これからはせっかくの素敵な出会いを逃していきたくない。もっと自分から話しかけたり連絡をとったりして持続させていきたい。もっと人に興味を持つということを心掛けたいと思う。今の世の中は本当に便利で、Facebook や LINE で世界中の人とやりとりができる。インドネシアの人からたくさん申請やメッセージが来て動揺しているが、面倒くさがらずに返していこうと思う。インドネシアの人に対してだけでなく、もちろんすべての人についても同じである。

そして、考えていくべきことは、便利な世の中がもたらすメリットやデメリット、幸せや貧しさとは何なのか、私自身についてである。カンプンナガの人々が電気を使わない理由は、火事や物欲競争による村人の争いを防ぐためであった。伝統や文化的な理由を想像していた私にはあまりにもシンプルな答えだった。便利になるにつれて私たち人間は欲が尽きなくなってきている。より簡単に、効率よくなるにつれ、自分たちが生み出した乗り物や道具によって何人もの人が毎日死亡し、インターネットによって孤独を感じる人が増え、自ら命を絶つ人が増加している。これが、本来求めていたものなのだろうか。新しい道具が出るたびに喜んで簡単に使用する前にそのものが社会にもたらす影響について、少し考えるようにしたい。その上でどのように使用すべきか見極められるようにしたい。

次に、幸せや貧しさが一体どういうものなのか。これはきっと考えれば考えるほどわからなくなるものである。資本主義社会の世の中でお金は幸せになるためには重要である。しかし、今回私が感じた幸せはお金によるものではなかった。私が日常で感じる幸せや貧しさは当たり前ではないのだ。そのことを意識して、生活したい。世界にはまだまだ知らない世界があり、どこへいってもこのことはつきまとい、大切な問題であると思う。

そして、私という人間についても考えていきたい。今回、私は私自身について考えることがとても苦手だという事が発覚した。そしてそれを人に伝えることも苦手である。こういうことはあまり考えないように生きてきたらしい。自分について何も知らない人間が他人を理解することはできないだろうし、何よりも次に繋がらない。これからもっと多くの人に出会い、学ぶ際にはとても重要なことである。これを機に、自分自身に問いかけるくせをつけていこうと思う。

だらだらとたくさん書き、まとまりのないものになってしまったが、本当はまだまだ書きたいことはたくさんある。たった 1 週間、されど 1 週間。日本では絶対に経験できない体験をさせていただいた。目標としていた友達が本当にたくさんできた。インドネシアでの出来事や経験、出会った人々は本当にかけがえのないものです。今回のプログラムに関わって下さった UHAMKA 大学の先生方、学生、出会った人々、仲野先生、小泉先生、一盛先生、一緒に行った鳥取大学の学生、家族、すべての人々にお礼を言いたい。

本当にありがとうございました！！そして、是非とも、これからもよろしくお願いいたします。

3. 地域学部地域文化学科 2 年生

Kampung Bandan

3 月 21 日、インドネシアのスラム街の一つである Kampung Bandan に行った。そこでは、橋の下や線路の間に家を作り住んでいる人や、家の設備もきちんとしていなくて、とても家と呼べるものではない建物に住んでいる人もいた。線路の近くには、捨てられたごみがあふれ、ひどい臭いを引き起こしていた。臭いや汚染を引き起こしているため、一緒に行った市内の学生もマスクをつけな

いと安心できないようだった。そのような住みにくい環境であるが、ここの人々は近隣の人達と協力し合いながら生活しており、私たちにも気軽に声をかけてくれ、写真をお願いすると快く写ってくれ、子どもたちに至っては写真を撮ろうとすると集まってくるほどであった。また、子どもたちは無邪気で、珍しかったのか、私たちの後をついてきて、とても人懐っこかった。村のリーダーに話を伺うと、主な仕事はゴミ集めなどの仕事で、低所得の職にしか就けないと聞いた。そして、村の子ども達も結局、親たちのような低所得の職にしか就くことができないという。このような将来はどうにか変えることができないか、とても難しい問題である。

スラム街と聞くと、そこはスリなどの犯罪にあふれ、人々の表情も町全体も暗い雰囲気を醸し出している、というイメージであったが、この村は全く異なり、環境さえ悪いものの、人々は助け合って生活しており、そして、人々には笑顔があふれていたのである。日本でも、生活の貧しい人々は暗い表情で自分の現状や将来に対し希望を失い､楽しさや幸せを感じていないように見えるため、この村の人達の明るさや元気に衝撃を受けた。一方で、自分が生活している環境がどんなに恵まれているものなのか、このような悪い環境の中でも、力強く生きていけることに、そして、子どもたちの純粋な笑顔に心を打たれ､今までの自分の生き方､考え方についても見直すきっかけになった。

Kampung Naga

3 月 23 日、電気を使わない村である、Kampung Naga へ行き、ハムカ大学の学生と一緒にホームステイをした。ここは、都会のごみごみした雰囲気や排気ガスの曇った空気から解放され、澄んだ空気の漂う、どこか懐かしい場所であるように感じた。ホームステイ先の家族は質問にも丁寧に答えてくれ、親切にもてなしてくれた。しかし、電気を使わないと聞いていたのに、幼い子供が携帯電話のようなものでゲームをしていて、目の前で電気を使っていることに、聞いていたことと異なり、とても驚いた。村では電気は通っていないが、違う町でバッテリーを充電し、家で使用するそうだ。面倒な作業ではあるが、少しでも電気を使用できることは、生活に違いを生み出すのだと思う。しかし、やはり村自体には電気は通っておらず、ある意味で原始的な生活を強いられている。村には病院や学校などの公共施設もなく、生活が大変だと考えていたが、私も実際に一日暮らしてみると､特に不便ではなく､時間がゆるやかに流れているため､私たちが過ごしている時間よりも､ここで過ごす時間の方が貴重なものに感じた。

そんな環境で暮らしているからか、村のリーダーに話を伺うと、何か問題があってもポジティブに考えて乗り切ると言い、環境と同じような、おおらかな性格の人が多いのではないかと思った。また、今では電気を使わない村として有名になり、観光客が一年に千人は来ると聞き、閉鎖された場所ではないということが分かり、余計になぜ近代化しないのか疑問に思った。しかし、電気を使わないのは火事が心配だからであると伺い、観光のために、これからは少しずつ電気を使うようになるのではないかとも思い、これからこの村も何か変化すると思うと、少しさみしささえ感じた。

Garut

3 月 24 日、イスラム教を重んじている村の一つである、Garut を訪れた。夜に村のモスクを訪れた時、コーランを勉強している子供たちとその先生に会うことができた。先生にいくつか質問をすることができ、そのことを通し、イスラム教が生活の中、そして、人々の考え方にまで根付いていることを改めて実感した。村の人はそう考えないであろうが、私の目から見れば、イスラム教を信仰する人は子どもの頃から強制されているように見え、この現状が、強固なイスラム社会を築いて

いるのだということが結びついた。しかし、子どもたちはやはり、笑顔で、自由が失われているようには見えなかった。信仰の自由など、選択肢を持つことができず、私たちから見れば自由でない生活がある一方で、日本人のように無宗教で、何でも選択ができる、自由な生活もある。しかし、どちらがより幸せであるかは、考え方次第であるが、私には、強制され、限られた生活を送るこの子たちの方が、幸せそうに見えた。

ヒジャブについて

ハムカ大学はイスラム教の教えに基づいた大学であるが、生徒の中には女性が頭に巻く、ヒジャブをしていない学生もいて、とても驚いた。インドネシアに着き、ハムカ大学に着いたとき、女性がヒジャブをしているのを見て、驚きよりも、自分が実際にインドネシアにいて、異なる文化に直面しているという、感動さえ覚えた。しかし、個人の信仰の自由の考えにより、普段のヒジャブの着用は強制されていないことを知り、インドネシア人の広い心を知って、インドネシア人の人となりを見た気がした。また、ハムカ大学の学生と関わり、話をする中で、イスラム教徒であるのに、遊ぶときだけでなく、学校にも、ヒジャブをつけないという子もいた。信仰の強さなど、様々な理由はあると思うが、インドネシアの人たちの自由さや緩さには、イスラム社会に対し、身構えていただけに、なぜか納得できない部分もあった。

また、現代のヒジャブはファッションとしても考えられていて、ハムカ大学の学生たちを見ていると、ひとりひとりのヒジャブの巻き方にも違いがあり、ファッションの一部として見ることができた。実際につけさせてもらうと、体の一部のように違和感がなく、ヒジャブを付けていれば、すくなくとも、髪は邪魔にはならないであろう。一番驚いたのは、一週間一緒に行動してきたハムカ大学の学生の二人が最終日の 26 日にヒジャブをしてこなかったことである。ヒジャブの有無はどのような理由であるのか、今でも疑問である。

インドネシアの人達

一週間のうち、三日間ハムカ大学の学部長の家でホームステイをした。私たちと一緒にハムカ大学の学生も入れ替わりながら学部長の家に泊まった。その時に学生の通訳を通じ、学部長の奥さんが私たちのことを自分の子どもも同然であると言ったことを聞き、とても驚いた。実際に、どのような関係であるか分からないが、学部長は血の繋がっていない母子を養い、家族として一緒に暮らしていた。そのような学部長とその奥さんであるから、たった三日という短い期間ではあるが、一緒に暮らした私たちを自分の家族のように扱ってくれたのだと思った。

そして、インドネシアの人達のもてなしには本当に驚かされた。一緒にプログラムに参加する仲間であると同時に、プログラムの最後まで、私たちは客であった。インドネシアでは、食事の際は年長者が支払う習慣があると聞き、普段から、もてなすことが習慣になっているのではないかと感じた。私たちも、毎回の食事だけでなく、元気がないように見えると、”大丈夫？”と声をかけてくれ、いつも気づかってくれた。また、26 日に行ったハムカ大学の系列の小学校では、私たちが到着すると同時に拍手と演奏や踊りが始まり、校舎案内などでも、多くの先生や学生がもてなしてくれた。

また、インドネシアの人たちが日本のこと、日本人のことを好きでいてくれていることを知った。今回の交流先の大学の学生たちが日本語を学んでいるということが大きいかもしれないが、移動中のバスの中では度々日本語の歌を歌ってくれ、特に、22 日のセミナーでは、私たちの周りにインド

ネシアの学生たちが集まり、まるでアイドルのように、何度も一緒に写真を撮った。ここまで私たちのことを歓迎してくれるとは思っておらず、インドネシアの人達が日本のこと、日本人のことを好きでいてくれてとてもうれしかった。

私は今回、プログラムに参加し、ハムカ大学の人達との交流を通し、インドネシアの社会や文化について直接自分の目で見ることができた。参加する以前は、インドネシアに関する知識はほとんどなく、日本とは全く異なるインドネシアでの生活に不安を感じていたが、実際に来てみると、人々のあたたかさや笑顔に触れ、一週間という短い期間であったが、ずっといたい気持ちになるほどだった。今回の研修で一番印象に残ったのは、どんな環境で暮らしている人も、笑顔が素敵なことだった。生活している環境が異なれば、人々の幸せの度合いなども異なるように考えていたが、実際はそんなことは関係なく、誰もが幸せそうに見えた。そして、私たちにいつも笑顔で親切に接してくれたことがとても心に残った。また、宗教が当たり前のように根付いていて、やはりどんな環境の街や村でも、モスクが必ずあり、イスラム教を尊重した生活があった。イスラム教が根底にあるからこそ、生活の豊かさや人々の心の豊かさを作り出していると感じ、インドネシアの人達は私たちが持っていないもの、あるいは忘れたものを持っているような気がした。

経済的な豊かさで見れば、日本の方が上かもしれないが、生活や心の豊かさは、インドネシアの人達の方が高いかもしれない。今回の研修では、多くの人達にお世話になり、形のあるものだけでなく、インドネシアの人達は私たちに、形のない、たくさんのものを与えてくれた。本当に、感謝の気持ちでいっぱいである。今回のプログラムで学んだことで、今とは違う、成長した自分になっていきたい。そして、次にインドネシアを訪れる時は、今度は私からみんなに多くのものをあげることができたらいい。また、みんなに会いたい。そして、いつか必ず、またインドネシアに行きます！

4. 地域学部地域文化学科 3 年生

初めてのお祈り

初めてハムカ大学を訪れた日、ハムカ大学の構内を案内してもらい、最後に敷地内にあるモスクに連れて行ってもらった。男女で分けられているモスクの中には女子学生しかいなかったが、雑談をしている子がいたり勉強をしている子がいたりと、お祈りを捧げるスペース以外は自由に使われていた。お祈りの前に専用の洗い場で身体を清め、顔以外がすっぽりと隠れるお祈り用の衣装に身を包み、見様見真似で一緒にお祈りをさせてもらった。日本でイスラム教についての事前学習をした時などに、お祈りの仕方というのは一応勉強していたのだが、実際に体験するのはもちろん初めてであった。立ったり座ったりを繰り返し、慣れない動作も多く戸惑ったが、とても貴重な経験をさせていただいたと思う。その空間は想像以上に神聖な雰囲気に包まれており、神様の存在をあまり信じていない私でさえ重苦しいような何かを感じた。それは恐らく隣で真剣に祈りを捧げている彼女たちから感じ取ったものだと思う。

学生の中には心からの信仰ではなく、やらなければいけないからという理由でお祈りをしている子も多いそうだ。だが、私が実際にお祈りを体験して感じたことは、やること自体に意味があるのではないか、ということである。もちろん、それに信仰心が伴えば言うことはないが、身体を清め、服を着替え、お祈りをする、という一連の動作は、私にとってはとても手間の掛かる作業だったのだ。それを毎日繰り返すというのは、習慣だとはいえ大変なことである。それに、信仰心が薄く半

ば強制的にとはいえ、あの瞬間だけは誰もが神と一対一で向き合い、その存在を感じているのだ。どんな肩書きや財産も、どんな苦しみや貧しさも、神の前では全て意味がない。一人の人間として、神と一対一で向き合っているのだ。それはとても孤独な時間なのではないだろうか。そして彼らは共通でその感覚を持っている。共有できる感覚があるということが、私は少しうらやましかった。

それと同時に、私は何かと向き合って生きてきただろうか？という疑問が湧いた。誰かと、何かと、真剣に一対一で向き合ったことはあるだろうか？もちろん、今までに全くないわけではない。だが、向き合うことを避けてきたことの方が多いのかもしれないと気付いた。自分には関係ないから、興味がないから、面倒くさいから、と何かと理由を探して見て見ぬふりをしてきたことがある。私はその都度、自分と向き合うチャンスも逃してきたのかもしれない。自分ではどうすることもできない問題に出会った時、手に負えないからとすぐに諦めてしまっていた。手に負えなくとも、向き合おうという姿勢こそが重要であるということを忘れていた。彼らは神という自分ではどうすることもできない大きな存在と向き合うことで、その他のどんな大きな問題とも向き合えるような力を育んできたのではないだろうか。隣で祈りの言葉をつぶやきながら、真剣に神と向き合っている彼女たちを見て、果てしないものに向き合うことの強さ、向き合うことを覚悟することこそが大切なのだと教えられている気がした。

Kampung Bandan

ジャカルタ到着 2 日目に訪れた Kampung Bandan という地域は私にとってとても不思議な地域であった。その地域にはあまり豊かではない人たちが住んでおり、密集した家々が特徴的な場所である。そこに暮らす人々はゴミの中から資源を集めたり、食べ物を売り歩いたりして生活をしているのだそうだ。私はこういった生活をしている人々をテレビで見たことがあった。そして知ったようなつもりでいたのだが、自分がいかに切り取られた情報を鵜呑みにしてきたのかということに気付かされた。実際自分の目で見て私は衝撃を受けた。理解できなかったのだ。そんな貧しい生活をしているのに、なぜそこに住んでいる人々が笑顔なのか。私がテレビの中で見たのは疲れた表情の人ばかりだった。だが、実際は穏やかな表情で私たちを受け入れてくれる大人たちと、無邪気に笑う子供たちがいたのだ。未だにその笑顔がどこからきているのか理解はできない。

ただ、そこに住んでいる人たちは同じ苦しみを共有しながら生活しているみたいだった。すぐ隣に自分と同じような環境で生活している人が何人もいるというのは心強いことなのではないだろうか。私だけじゃないと思えること、それだけで人は安心することができるはずだからだ。言葉にしなくても、それが例え苦しいことだったとしても、共有できる相手がいるというのはそれだけで自分を強くしてくれるのではないだろうか。日本では他人と感情を共有するということは少ない。喜びなら進んで分かち合おうとすることもあるが、苦しみや辛さを分かち合うことはあまり良いことだとされていないように思う。私たちは苦しいことや辛いこと、悲しいことなどを隠したがる。それは弱さだからだ。自分の弱みを他人に見せないことは良いことだとする文化もある。感情を共有すること、苦しいのは自分だけじゃないと思えること、それを分かち合ったからといって状況が変わるわけではないかもしれないが、重要なのは自分の声を聴いてくれる人が近くにいること、声に耳を傾けて、手を差し伸べてくれる存在がいることなのだと気付かされた。

モスクでの勉強会

Gurut では Aim 先生のお宅の近くにあるモスクへ行った。モスクの 2 階は勉強スペースになって

おり、子供たちが男女で別れてイスラムついての勉強をしていた。7 歳からでなければ 1 階でお祈りすることができないらしく、7 歳になるまでにお祈りの仕方やコーランについて学ぶ場でもあるようだ。私たちが伺ったのは 19:30 頃だった。子供たちは昼は小学校へ行き、夜はモスクで勉強をしている。モスクへは行きたい時に行くというような勉強スタイルではなく、休んでいいのは決められた曜日と病気の時だけのようだ。幼い子供たちには少し負担のようにも思うが、ズル休みをするような子はほとんどいないらしい。また、モスクへ通っている子供たちの年齢がバラバラということもあり、年上の子が年下の子の面倒を見るというような、地域的なつながりを育む場としても重要な役割を果たしているのではないかと感じた。

私たちが見学のために中へ入ると、子供たちはお行儀良く端の方へ固まって座りスペースを空けてくれた。みんな興味津々な表情で私たちを見ていたが、私たちが彼らの先生から話を聴いている間騒がしくなることもなく、ずっと待っていてくれた。お話を伺う前に、その子供たちの中から女の子が一人選ばれ、私たちのためにコーランを読んでくれた。その女の子はリズムに乗ったようにスラスラとアラビア語を読んでいた。大人でも読み方を忘れて詰まってしまうことがあるらしいコーランを、まだ幼いその女の子はとても上手に読んでいた。これも日々の勉強の積み重ねの成果なのだろう。

私はずっと、イスラム教は日々の生活の中で文化として取り込まれていくものだと思っていた。宗教学校へ行かない限り、イスラム教は学校の授業で勉強するくらいで、そのほとんどは習慣として染み付いていくのだと考えていた。でも実際は一般の子供たちの多くが、地域のモスクで開かれる勉強会に参加し、イスラム教を学んでいた。彼らのイスラム教徒としての自覚は自然に発生したものではなく、学びを通して確立されたものであるということを知った。私は日本人であるための努力はしていない。それは努力をする必要なしに与えられたものだからである。だが彼らはイスラム教徒になるための努力をしている。努力をしなければイスラム教徒にはなれないからだ。つながりを作るということは、それほどまでに難しいということなのかもしれない。それ故に彼らはイスラム教というものに対して、愛着や執着心があるのではないかと思う。簡単に切り捨てるわけにはいかないし、切り捨てることのないように幼い頃から訓練を受けているのだ。頑張って掴んだつながりだからこそ心の拠り所になり得るのだろうし、自分で築き上げる以上に安心して寄りかかれる安らぎはないのかもしれない。

その訓練を言い換えれば､選択肢のない強制的な刷り込み教育という風にも捉えることができる。だが、選ぶことのできない環境の中に有無を言わさず放り込まれることは、どんな文化にもあることだ。彼らが強制的にムスリムになるように、私は強制的に私になったのでないだろうか。だが、彼らと私の間には決定的な違いがある。私は自分自身に違和感を覚えた時、変わろうと思えばどんな自分になりたいか自由に決めることができる。だが彼らはそうではない。イスラム教徒でなくなることは簡単なことではないはずだからだ。彼らは幼い時からムスリムとして育てられ、そのまま自然の流れで大人になってもムスリムとして生きていく。私は決してそれ自体が悪いことだとは思わない。私自身も植えつけられた価値観を持っているからだ。それが宗教という精神的な面が強い選択になると、いきなり悪いことのように感じてしまうだけで、どんな人であれ少なからず偏った価値観を持っているものではないのだろうか。ただ、その価値観や文化から抜け出せないということには窮屈で圧迫されたような感じを受ける。抜け出すという選択肢を簡単に選べないということに少し違和感を覚えた。だが、だからこそ彼らはより強く自分のいるべき位置を確信することができるのではないだろうか。そこに確実な自分の居場所を見つけることができるのかもしれない。も

しかしたら、選択肢のない幸せというものが存在するのかもしれないのだ。私たちはどこにでも行けるけれど、どこにでも行っていいからこそ逆に足元が不安定になってしまっているような気がする。選択肢があることは幸せだと思ってきたが、本当にそうなのだろうか。選択肢がないことは不幸なのか。色々なことを考えさせられた夜だった。

私が出会ったインドネシア

ジャカルタに滞在している間は、学部長のご自宅へホームステイさせていただいた。学部長はとても優しい方で、にこやかな表情をいつも絶やさずにいてくださった。また、学部長のご自宅からハムカ大学までの移動中、私たちが退屈しないようにインドネシアで有名な曲の CD を探して音楽をかけ、歌詞の説明などもしてくださった。食事の時も、私たちに料理の説明をしてくださり、紅茶をつくってくださったりもした。Kampung Naga で村の説明をしてくださった村長も、モスクで子供たちにイスラムについて教えている先生も、私たちを快く迎え入れてくださり、質問などにも真剣に答えてくださった。学部長や村長、モスクの先生に共通していて、私が一番印象に残っているのは、あの優しそうな表情とはにかんだ笑顔である。みなさん共通して温かい雰囲気があり、恥ずかしがり屋かと思わせる表情を見せるのだ。そこには威張っている様子も権力を振りかざす様子もない。もちろん、たった一週間では本当の所は分らないし、一回しかお会いしていないのに判断できるはずもない。だが、実際に学部長は気さくに生徒との会話を楽しんでおられ、ハムカ大学で出会った先生方は皆さん生徒への関心が高いように感じた。生徒たちも先生への信頼を示しており、とてもうらやましい関係が築かれているようだった。

インドネシアでは、どちらが上か下かどちらが高いか低いかではなく、どちらが広いか狭いかで人を判断するのではないかと感じた。金銭的な豊かさよりも、精神的な豊かさを重要視している印象を受けた。日本では常にどちらが優秀かそうでないか、どちらが魅力的な考え方ができるかどうか、というように能力や性格でランク付けされているような気分を味わってきたが、インドネシアではそういった順位は授業とそれ以外の時とできちんと区別されているのではないかと思う。先生方は無邪気で、私はまさかインドネシアで涙が出るほど大爆笑するとは思っていなかったのだが、その想像を裏切られるようなとても面白い会話を楽しませていただいたこともある。その思いがけない出来事は、私が今まで抱いていた先生像を壊してくださった。

学生たちもみんな本当に楽しそうに笑う。明るくて、ずっとテンションが高く元気だった。私が疲れて黙っていると、「大丈夫？疲れましたか？」といつも声をかけてきてくれた。その輪の中に、常に私を引き込もうとしてくれたのだ。私がもてなされる側のお客様だったからなのかもしれない。だとしても、“私たちはあなたとつながりを持ちたい”という意思表示を積極的にしてくれる彼らや彼女たちの輪の中に引き込まれることに、私は安心感と充実感を覚えた。彼らは人へ対する好奇心がとても強い。静かな私に気をつかっているのではなく、静かであるということが本当に疑問のようだった。彼らにとって、大勢でいるときに一緒になって騒ぐことは自然なことであり、そういった場面で静かにしているというのは不思議で理解できないことようだった。輪の外にいる人間を放っておけない彼らは、つながりを意識したことがあるのだろうか？確かなつながりの中にいる人たちは、そんなことは意識していない気がする。意識する必要もないのだ、しなくてもそこにあるのだから。私たち日本人はつながりは作るものだと思っており、誰かとつながることや絆を結ぶことは特別なことのように表現されることがある。だが、インドネシアで出会った彼らにとってつながることはごく自然なことで、日常の一部である。それは意識しなくてもそこにあり、作るものなん

かではなく、気付いたらすでに誰かと一緒にいるのだ。言い換えれば一人にさせてくれない環境があるのである。そこには“つながらざるを得ない”という良い意味で窮屈な関係性があるような気がする。離れたりくっついたりが自由にできるような不安定な関係ではなく、簡単に離れることができない関係性の中には安定感が生まれる。その安心感があるからこそ、彼らはのびのびとコミュニケーションを楽しむことができているのではないだろうか。

私が見たインドネシアは温かく、笑顔にあふれていた。もしも日本が心の広さや、思いやりの度合いで人が評価されるような国になれば、もっと皆がのびのびと生きやすい環境を築くことができるのではないかと､夢みたいなことを考えてしまうほどであった｡そんなことを思ってしまうほど、私がインドネシアで出会った人々はみんな素敵な人たちにばかりだった。私の生きてきた世界だけが常識ではない。もっと自然に、もっと素直に物事を受け入れても大丈夫なのかもしれないと、気持ちが少し軽くなった気がした。インドネシアで過ごした一週間は私の中でとても貴重な経験の連続だった。多くの感情に出会い、戸惑うこともあったが、そのひとつひとつがこれからの私を支えてくれる気がする。ただ、私が見たインドネシアが全てではないはずだ。一つの角度から見た印象だけで、全てを語ることは間違っている。でも、たくさんの角度の中からこんなに素敵な一面が見れたこと、見させていただけたことに感謝の気持ちで一杯である。たくさんの笑顔と、たくさんの優しさをくれたインドネシアの方々に本当に心から「ありがとうございます」と言いたい。そして、いつかまた必ずインドネシアを訪れ、大好きなみんなに会いたいと思う。

5. 地域学部地域環境学科 2 年

海外フィールド演習に参加した感想と成果

プログラム中で印象的だった出来事の感想を述べる。

21 日の午後、まずは大学の見学をした。その時モスクにも立ち寄った。ハムカ大学の女学生たちと一緒にウドゥーを体験し、お祈り用のベールを着させてもらった。時間の関係上私は実際にお祈りをすることはできなかったが、ウドゥーをした後は明るく、すがすがしい気分になり、心身ともにさっぱりときれいになった気がした。実践してみて、お祈りブレイク（片倉もとこ『イスラームの日常世界』）という表現に納得がいった。お祈りが生活リズムであるムスリムは、それをすることによって仕事や勉強が能率よくできているのだと実感じた。

その後、カンプンバンダンという、世界で一番世帯が密集している地域へ移動した。そこでは、ごみが散乱、山積していてそこから異臭も漂っていた。雨風もしのげないような小屋で生活している人もいた。その風景をみる私の顔は自然と曇っていったが、そこに住む人たちの表情は明るかったことがとても印象的であった。子供たちは無邪気に笑いながら私たちの後を付いてきた。大人も私たちが家をのぞき見たり、写真をとったりすることに寛容だった。そののびのびとした、人の雰囲気や笑顔からカンプンバンダンに住む人たちは、自分たちの生活環境に満足はしていなくとも、現状を受け入れた生き方をしていると感じた。私たちの日本の社会は、臭いものには蓋をするように不快な世界を排除し、生活する私たちが常に快適なように作為的に形成されている。その環境が大前提であり、幸福なのだという社会で育った私には、不衛生で、整備されていない村で暮らす人たちの笑顔は衝撃であった。しかし、生まれ育った日本でのいわゆる快適な生活と私を今更切り離すことはできない。例えば、カンプンバンダンの様な環境の中で生きることはおそらく精神的にできない。

それほど、今不自由のない生活を送っているにも関わらず、日本で充実した生活を送れていなか

ったのはなぜだろうか。日本の社会を非難するわけではないが、快適な生活の中でうまく自分の幸せを見つけられていない気がした。生活が豊かになれば幸せ、という大前提があっても、それに慣れ、またはそれを省みることすらできないようなめまぐるしい毎日を送っていることが分かった。日々生きているというよりも、日々をこなしていると言う方がふさわしい生活を送っている。そのせいか、豊かな自分の生活を考えられるような隙がなく、自分が今まで、不自然な世界を当然のように自然なものととらえていたことが分かった。

22 日に、先生方のセミナーと私たち学生のワークショップが行われた。セミナーには、ハムカ大学の学生が大勢来ており、彼らは人の話を聞いて素直にリアクションしたり大きな声で返事をしたりしていた。わーっと会場が湧くこともあり聴衆の学生たちもセミナーを作り上げているような、全体の一体感があった。それがとても心地よく、発表者と聞き手が対話している安心感があった。その反面、公演中に電話がなったり、携帯電話を操作している人がいたりするなど、態度はさまざまで終始ざわざわとした実に自由なセミナーであった。ワークショップでも、学生たちが私のつたない英語を理解しようとしてくれていることが相槌や視線で伝わった。そのセミナー後から、ハムカ大学の学生との距離がぐんと近くなり、遠慮などの壁がなくなった気がした。

23 日は、バスで Kampung Naga に行った。朝大学を出て、ところどころ停車して到着したのは夕方だった。行く途中に昼食に立ち寄った屋外のお店では、棚田や山などの緑色があざやかな原風景が見えた。作られた感じがしないありのままのその景色のなかでは、時間がゆっくり流れているようで、ずっとその景色を見ていたいと思うほど癒しをもらった。そんな自然を前にして自分は無力になって包み込まれている安心感があり、とても心地よかった。目的地の Kampung Naga でもそう感じることがあった。村の風景は、日本の白川郷に似た伝統的な農村風景で、どこか懐かしく、また外の世界に脅かされることのないようにひっそりとたたずむ秘境であった。到着してからホームステイをするお宅へ分かれた。私がホームステイしたお宅のお母さんはとても親切で私たちに常に気を配ってくださった。もともと電気が通っていない村と聞いていたので、とても不便なのだろうと思っていた。夜になれば、確かに暗くなるが、ランプの明かりをつければ特に不自由なく視界が確保でき、炎ならではのあたたかみが感じられた。

私にとって忘れられないのはトイレ兼お風呂である。それは、池の中にあり、竹やコンクリートの策と足場、流水口があるだけという大変開放的でシンプルかつ大胆なものだった。用やかけ水は足場の穴から池に流れる。私は、はじめこれを見たとき、どうやって洗うのか不安で仕方がなかった。いざお風呂に入るとき、あたりが暗く、不注意だったことから、私は足場の穴に太ももの付け根まで落ちた。一瞬のことで何が何だか分からないながらも落ち込んだが、今となっては良い思い出である。また、野外での洗髪はとても開放的で気持ちが良かった。私は電気がない、シャワーなどの設備が整っていない＝不便と結び付けて考えていたが、そう考えること自体が不便なのかもしれないと感じた。私たちはより快適により楽にと、欲をかいて利便性を物に追求しすぎたために、それに頼って、自分が可能だったことが不可能になり人間自体は不自由になっているところがあると思った。

Kampung Naga では、あえて電気を普及させてないという。なぜなら、電気を巡って他の地域と競合することを避けているのだ。すばらしいと思った。この時代のこの世界にこういった調和や協調を真っ先に考えられる Kampung Naga の人々を尊敬したい。また、それを聞いて希望にも似たような、とても温かい気持ちになった。私自身は自分主体で自分が良ければ他はどうでもいいと考える人間であるので、Kampung Naga のそのスタイルに今の自分が問われているとも感じた。電気以

外にも、今ある森を壊すなどして村を広げることを望んでいなかったり、農業の生計スタイルを変えずに守っていたりしていて、彼らは欲のない、いたって simple な生き方をしていることが分かった。私は、将来もずっとこの村はこのままの生活スタイルを変えないだろうと思っている。それが観光産業であるだけでなく、この村が先頭に立って、私たち観光客に他を配慮し、欲にとらわれない生活を教えてくれる役割を担っていると思うからだ。この村の生活をたくさんの人に伝えてきたいと思う。

24 日の午後から、Aim 先生のお宅へ移動した。到着後、その地域のモスクを訪問した。そこには大勢の子供たちがイスラムを学びに来ていた。聞くと、3〜14 歳の子供たちが金曜日以外の早朝と夕方、学校に行きながら勉強をしに通っているという。これには驚いた。私には、この地域に生まれ育てば自動的にムスリムになり、選択する自分の意志を持って集まっているとは思えなかったからである。知らず知らずのうちに半ば強制的にムスリムになったのではないかという私の心配をよそに子供たちはいきいきとしていた。小さなときから刷り込むように体に教え込んでいるのが分かった。私はこの雰囲気に異様さを感じた。イスラムに入信することがまっとうで、子供のころからイスラム世界が自分の世界になってしまったら、もったいないという気がした。無宗教からスタートしてさまざまな宗教を学んでからイスラムを選ぶというのが腑に落ちるからだ。私は多種多様の中から選ぶことの自由を必要としている。たとえば私は、このプログラムの内容すべてを肯定しようとは思っていない。イスラム世界すべてをうらやましいだとか良いとすることの方が恐ろしい、といった私の考え方である。なぜ私は世界を客観視し、判断することが重要だと考えるのか。私は、自分は「疑いの目をもつことを信じている」一種の宗教なのだと感じた。思えば、私は普段から基本的に人を信用しない。それは自分が一番信用できるものだと思っているからだが、その自分こそが最も疑うべき対象であったことに気が付いた。1 つの世界に縛られないようにと、あらゆることに依存することを避けてきたことが、逆に自分の行く道を限定させていたのではないか。そのようにモスクで出会った子供たちを振り返って感じた。

その後、夕飯をいただいて、Aim 先生のお父さんの話を聞いた。その方は、日本がインドネシアを植民地化していた時代や独立後のインドネシアを生きてこられた方で、植民地時代のことや日本に対する思いを話してくださった。日本に植民地化されていたにもかかわらず、日本に感謝していると言う。素直に納得できる話ではなかったが、日本はインドネシアに多くの知をもたらしたそうだ。私はそう感じるように日本から恣意的に教育されたのではないかと思ったが、日本の過ちを弁護してくれるお父さんの考え方は日本人の私にはとてもありがたかった。私たちが体験してなくとも日本の侵略や戦争の過去は事実であり消せない。しかし、未来は今を生きる私たちに因るものであり、良い方にも悪い方にも私たち次第で変わる。憎しみや争いは結局互いに無益である。お父さんが、本来憎むべき対象の私たち日本人に理解と協調性を示してくれたように、この志を私たちもつなげていかなければならない。また、今の日本をもっと見つめていかなければならないと感じた。悲惨な過去を繰り返さないためには、私たちひとりひとりがその意識を持つことが必要である。そのことが理解できたとき果てしなく地道な歩みだと落胆した。しかし、小泉先生が、人間は本来動物として争うものだったが、今やっと平和へと動き始めている、とおっしゃっていた。今の国際社会を悲観するのは簡単だが、そうとらえれば、地道にも着実に希望の光はさしているのではないかと思った。

スケジュールを通じて移動のバス内では、笑い声や歌声が絶えなかった。ハムカ大学の学生たちは日本の音楽に詳しく、日本の歌を一緒に歌うことができた。ごく普通のギター1 本と歌声だけで、

こんなに人を幸せにできるのだと感動した。音楽は世界共通言語であると感じた瞬間だった。歌を一緒に歌うだけでどうしてこんなに感極まるのだろうと不思議に思った。お互い住む環境や思想は違えども、同じ音楽で同じ方向を向き、ハーモニーを成していたことが私に安心感を与えた。ふと、これが相手を理解することなのではないかと感じた。単に移動のバス内でみんなで歌っていただけの一瞬もそう考えると大切な時間であった。

また、ハムカ大学の人は、時間を重視していないと思った。それはスケジュール通りに予定が進むことがなかったからである。5 分前行動を叩き込まれ、予定通りに事を成すことが良いとされる日本社会とは正に真逆だ。良く言えば、一瞬一瞬をのびのびと生き、時間や目的にとらわれてない。日本での私は時間に追われ、生き急ぎ、大切なものをたくさん見落としている気がした。

プログラムを通じて何よりうれしかったことはハムカ大学の学生たちと友人関係を築けたことである。彼らは私がひとりになるか黙ると、すかさず話しかけて笑ってきた。さみしい私に同情している風ではなく、単にみんなが楽しい方が良いから笑っているという風に見えた。日本の放置社会とは対照的で戸惑うこともあったが、誰も除かれることなくその場にいる全員で「楽しい」を共有しようとする人間性に非常に温かみを感じた。ハムカ大学の学生たちは私よりも相手を気遣い、輪を成そうとすることに長けていると感じた。そしてそのような人間関係を日本でも築きたいと思えた。

この研修をきっかけにした今後の自分の生き方の展開の可能性

私がこのプログラムに参加したきっかけは、自分の知らない世界を見てみたいという単純で直観的なものであった。日本での日常はあまりにも単調で、私はどこかへ飛び出して刺激を受けたいと感じていた。このプログラムに参加したことは、私のこれから長く続くだろう人生にとって、欠かすことのできない出会いだったと思う。

まず、上の感想でも述べたように、日本での当たり前が世界ではそうではないなど、今日本に住む私のおかれている環境や社会について相対的に知ることができた。日本の現状が鏡のように返ってきた。生活の質と幸福度は決して比例しないこと、欲をかいて争うことの無益さや、周りを理解、配慮し協調性を持っている人々との出会いは、大きなショックだった。日本での私生活や考え方を再考させてくれた。日本では人権のもとに人が孤立化している。私はワークショップで本音が言えないコミュニティに自分がいることを発表した。自分を守れば傷つかないはずだったが、それが孤独を招いていたこと、同じ角度から物事を見ることを避けていた自らが、偏って物事を考えていたことに気づいた。インドネシアでいきいきとした学生たちと出会い、自分という個性を知ってもらいたいと思えるようになった。互いに開かなければ相互の理解はあり得ないということが実感できた。この思いを日本での生活にも持ち寄って、相手を知るためまずは自分から心を開いていこうと思う。単純に言えば、考え方が少し前向きになった。他人を警戒し、自分をさらけ出さなかった今までの自分の視野は狭く、人と接するとき一度フィルターを通そうとする曇ったものだったが、それが、少し明るく、かつ広範囲に物事を見られるようになり、なんとなく物理的にも自分の視界が広がった気がする。忙しい毎日であっても、今を逃さず楽しい時間をとらえようという意識とそういった少しの余裕を持とうとしている。自分を苦しめないイスラムの理念にならって物事を前向きにとらえる力を付けていきたい。

そして、自分の感情になぜ？と問いかけることのむずかしさを感じた。今まで私は感情の所以を考えたこともなければ、考えようとしたこともなかった。何が私に作用しているのか、見えないものをたぐり寄せることは自身と正面から向き合うことである。私は、他人の世界を疑う「自分」と

いう人間に偏って信頼を置いていたことを発見できた。疑うことで視野や選択肢が広がると信じ客観こそ重要としていたつもりが、それは主観の塊だったのかもしれない。今までの私のセオリーからいうと、1 つの角度に見方を絞ることを極端に警戒していたが、そういった自分の恐れている世界に知らず知らずのうちに自身を追いやっていたのだと思う。時には疑うことも必要だが、相手の世界を受け入れ、選択もしていかなければ本当の意味での私の客観は成立しないことが分かった。このプログラムの入口はイスラムであったが、あらゆる道を通り、最後にまた同じ 1 つの出口に繋がった。それは、自分とは違う相手を受け入れ、分かり合うことである。思い遣りの輪を作ることである。小学生の道徳教育で言われていることを、大学生になって改めて主張することに少しためらうが、実はそのくらい simple なことが最も難しいのではないのだろうか。宗教や国、民族から私たちの身近なコミュニティまでその範囲内である。そしてこれは、私の課題でもある。今、一個人としてわたしになにができるのか。日本に帰った私には、また今まで通りの生活が待っている。その中でこのプログラムで味わえた貴重な体験や自分の感情を忘れないこと、また少しずつ伝えていくことをしていきたい。

留学、学習、国際理解への意欲に関する参加前後の変化

日本にいても日本の実情はとらえづらい。外国へいってさまざまな人と出会い、あらゆることを見たり聞いたり、嗅いだり食べたりして異様さや違和感を覚えることが日本を理解する一番の近道だと思う。日本人は自分の国について無知あるいは無頓着、という問題がある。これは、学生の内向き志向(海外へ行こうとしない傾向)と同じである。日本を相対化することがうまくできないどころか、日本を顧みる機会もないのだ。ちょうど自分を疑うことをしなかった今までの私と同じである。動きる続けることは日本をみつめること、そして自分をみつめることにもなる。このプログラムに参加して、前にも増して外国へ旅立ちたくなった。今まで知りえなかった世界に出会って、私とは全く違うルーツを持った人と話したい。そしてその世界を受け入れ、共有し、今まで知りえなかった日本と自分に出会いたい。悪い面ばかりでなく、日本と自分の良い発見もたくさんあると思う。また外国に行くことに限らず、新たな環境や人との出会いは、自分へ跳ね返って従来の自分の環境や自身への発見に変わる。そのとき自分を大きく成長させると考える。

人と話すには、媒体として言語が必要である。私はこのプログラム中、英語を話そうと努めていたが、うまく伝わらずもどかしい思いをたくさんした。英語は自分と違う世界を持つ人との意見交換の必須ツールであると実感した。私がそれらの人と英語を通じて話すことができたなら、それはまさに私とそれらの人とをつなぐ架け橋の役割を担う。ハムカ大学の学生たちと表面的なコミュニケーションや感情のやりとりだけでなく、互いの国についてディスカッションできれば更によかったと思った。しかし、このプログラムで今回、自分の意志が伝わらず、英語でうまく表現できない体験ができて逆によかったと思う。帰国後は、英語を少しずつ勉強して、実際に話すときに使えるようになりたい。また、意思疎通がうまくいかないながらも私たちと共に行動し、世話をして温かく迎えてくれたハムカ大学の先生方、学生たち、ホームステイ先のご家族に心から感謝したい。

当初、このプログラムの参加希望者は定員を超えており、選考が必要であった。希望者全員が参加できない中で、私が選ばれ、たくさんの気付きを持って帰ることができたことを幸運に思う。日本で渡航の準備をしていたころは期待と不安が入り混じり、笑顔で日本に帰ってこられるのだろうかと、疑っていた。しかし、本当に出会いに恵まれた 1 週間であった。今までの見ていたものとは

全く違った日本や自分との出会いは、日本での生活や私の人生そのものを浮き彫りにして私に問いかけるものだった。前にも同じようなことを述べたが、これからの私の人生を大きく変えるものであった。このような出会いをもてたこと、そのような体験をさせてもらえたことに感謝の気持ちでいっぱいである。そして何より、人との出会いが素晴らしかった。ホームステイ先のお母さん(Kampung Naga)、学部長、Aim 先生と Aim 先生のお父さんを始めそのすべてのご家族の方々には、多くのもてなしや心配りをいただき、本当にありがたかった。また、私たちと共に行動したりしてプログラムに関わってくださった HAMKA 大学の先生方との出会いにも感謝したい。人との出会いで最も印象深いのは、同世代の HAMKA 大学の学生たちや通訳のアブディさんとの出会いである。それは、一番関わる機会が多かったからだと思うが、彼らのそのバイタリティや無邪気さ、笑顔が忘れられない。彼らとの出会いがあったからこそ、プログラムを通じて幸せを感じられ日本ではありえないほどの笑顔に囲まれていたのだと思う。コミュニケーションをとり仲が良くなるにつれて、表面的ではない彼らの生きる世界や思想を知りたい、受け入れたい、そしてもっと彼らに近づきたいと思った。彼らを切り口にして、日本にいたころのイスラム教への大きな壁もなくなっていた。

国際交流や理解において、国や宗教、民族などの大きな背景を背負うと何かと問題を生みがちではあるが、一個人を尊重するという原点に立ち返れば、誰にでもでき、また、根底では誰もがそれを大事にしようと思っているのではないだろうか。そう思えば、国際交流や理解とは誰でもできる簡単なことである。思想などの深い話はあまりできなかったが、日本語や私のつたない英語を通じて楽しい会話ができて良かった。短期間ではあったが、それを感じさせないほど親しみを感じている。海を越えて、彼らも朝を迎えていると思うと元気が出る。濃いプログラム内容から得られるものもたくさんあったが、HAMKA 大学の学生たちと共に行動することで、知らず知らずのうちに「あらゆる人を認めていく姿勢」という大事なものを教わっていたのかもしれない。改めて彼らと過ごした日々を振り返り、充実していたことを実感する。

最初のオリエンテーションにて、プログラムの進行を担う先生方は、このプログラムの存続および発展に期待しておられた。私も同感で、ハムカ大学と鳥取大学の交流や学生交換がこれを機にますます盛んになることを願っている。

（2013 年 10 月 4 日受付，2013 年 10 月 10 日受理）